
俺とバカと召喚獣

結城啓介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とバカと召喚獣

【Nコード】

N2713N

【作者名】

結城啓介

【あらすじ】

試験召喚獣システムを取り入れた試験校文月学園。Fクラスになった、超絶過保護（明久と秀吉に対してだけ）『小此木 遼平』が幼馴染の吉井明久や木下秀吉を始め、坂本雄二ら親友と共に学園に嵐ならぬハリケーンをまきをこす！！やっとなたぜ『清涼祭編』！！

プロローグ(前書き)

〔注意〕

作者は投稿に慣れてない為駄文かもしれませんが、「バツチこーい
!」

という方だけおすみください。

覚悟はいいですか？

では、バカテスワールドにどうぞ!!

プロローグ

俺らがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

淡いピンクと青い大空のコントラストには誰もが目を奪われる光景だ。

だが、俺にとってはそれも一瞬のこと。

今俺の頭にあるのは春の風物詩ではあるけど、桜ではない。

俺の頭は今年一年を共に戦い抜いていく戦友と教室 要するに新しいクラスのこと一杯になっていた。

「小此木、遅刻だぞ」

春の木漏れ日を肌で感じながら歩いているとドスのきいた声に呼び止められた。声のした方を見ると・・・ドンキーコングが立っていた。

「あ、ドンキーコング・・・じゃなくて、鉄人先生。おはようございます」

「言い直しても間違ってるぞ、小此木・・・」

「え！？違つんですか！？鉄Z・・・じゃなかった、ドンキー先生」

「もはやさつきとも違つぞ！！」

「おはようございます。西村先生」

まだ誤魔化せるはずだ！！

俺の全身から大量の冷や汗が出てきた。頼む、見逃してくれ！

「お前には特別補習を授けてやるつか？」

無理だった。

くそ！新学期早々なんて奴だ！！血も涙も無い鉄人め！！この年中半ズボンわんぱく小僧が！

「なんか言つたか、小此木」

「いいえ、何も」

ゴリ・・・鬼の様な顔で俺を睨み続ける鉄人。

はつきり言つて顔が近い。うっぷ、吐き気が・・・。

「・・・・・・・・つたく、お前という奴は・・・受け取れ」

鉄人がポケットから封筒を取り出し、俺に差し出した。宛名の欄には『小此木 遼平』と、大きく俺の名前が書いてある。たぶん、ク

ラス発表の紙だろう。

「……………鉄……西村先生……………」

「なんだ小此木、早く見ないのか？」

鉄人が珍しそうに俺を見る。そりゃそうだ、大体の奴は素早く開けて中身を見て、泣いたり・怒ったり・笑ったりするが、俺はしない……いや、する必要が無い。なぜなら……………。

「この中身……………当ててあげますよ」

「なに……………」

「俺は……………Fクラスですね？」

俺は言ったと同時に封筒を破り、中の紙を見た。

俺の言ったとおり、Fクラスだ。

さあ、ココで一つ問題だ。なぜ、俺は自分がFクラスだと分かったと思う??ちなみに俺は成績は優秀だぞ。(一定の教科だけ)さあ、何ででしょう???

「……………ま、まさか……小此木、お前!!！」

「西村先生……せいか……………い!!!ピンポン!その通り」

「……………まさか、お前という奴は……………はあ……………」

鉄人が呆れた様に呟く。だって、しょうがないじゃん。アイツは、無理なんだから・・・学力上げるの・・・。

「まさか、自分からFクラスに行く奴がいるなんてな・・・。。。。史上初だぞ。」

「そんなに褒めんなよ、照れるだろ!!」

「褒めてないわ!!!このドアホ!!!たく・・・さっさと教室に行け。」

俺にそういい残すと鉄人は職員室の方に消えた。

俺はもう一度紙を見る

『小此木 遼平・・・Fクラス』

「面白いクラスになりそうだな。」

俺はそう呟いて自分の教室・・・Fクラスに向かった。

こうして俺の最低で最高のクラス生活が幕を開けた。

プロローグ（後書き）

・・・・・・・・長い!!

スンマセン、本当に・・・・・・・・なんか、打ってたら長くなっちゃって

感想お待ちしております!!

第一話（前書き）

バカテスト第一問：以下の意味を持つことわざを答えなさい。

（1）『得意なことでも失敗してしまうこと』

姫路瑞希の答え

『河童の川流れ』

教師のコメント

さすがは姫路さんです、簡単すぎましたね。

土屋康太の答え

『河童も木から落ちる』

教師のコメント

是非、その光景が見たいです。

吉井明久の答え

『喝破の革薙がれ』

教師のコメント

……とりあえず、漢字を勉強しましょう。

小此木遼平の答え

『錬金釜』

教師のコメント

先生も時々失敗します。

第一話

「なんだ・・・・・・・・これは・・・・・・・・。」

俺は今Fクラスの前にいる・・・・が。

流石のFクラスでも、設備はまあまあだろうと思っていたが・・・・
・酷すぎる。

「非道だろ・・・・・・・・この学校。」

Fクラスに来る前の他の教室はEクラスでさえ机なのに、Fクラスは外見から机は無いだろうと考えるほどのボロボロさ・・・・。流石にFクラスになったのを後悔しそうになる。

「・・・・・・・・しゃーねーな・・・・よし、いっか！」

俺は覚悟を決めてFクラスのドアを開けた。

《ガラ》

「こんにちわーーーーー」

「早く座れ、このゴキブリ野郎」

「黙れ、天然危険物野生男」

「なんだと！遼平！！」

俺に罵声を浴びせたのは、親友・・・・いや、悪友の坂本雄二だ。

「つーか、なんでお前がそこにいるんだよ？担任は？？」

「まだ来てない、代わりに教壇に上がってみた」

「つーことは……雄二が代表か。」

「ああ、そつだな。」

まあ、雄二ならそこらの雑魚には負けないから安心だな……
・たぶん。(コイツが油断してなければの話だが)

「ささささ、通してもらえますか？」

担当の先生が来たらしいが、ヨレヨレだな……この先生。鉄人を
見習ったらどうだろう。無理か。

「では、自分の席についてください。HRを始めます」

「「「うーっす」」」

俺と雄二はそれぞれ返事をしてそこらの席に(いいのか?)着く。

ヒョロ男は教壇に立ってゆっくりと口を開いた。

「えーおはようございます。Fクラス担任の福原です。よろしくお
願います」

ヒョロ男は黒板に名前を書こうとしたが、すぐに振り返った。どう
やら、チヨークが無いらしい。

その後、色々とFクラスの設備について話を聞き&設備の不備を申し出るも、あっさりと却下された。

「では、自己紹介でもしましょうか。廊下側の生徒からどうぞ」

ヒヨロ男の指名を受けて廊下側の生徒の一人が立ち上がった。ん？
？あれって……

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

やっぱり秀吉だ。独得の言葉遣いをしているはたから見れば美少女は、木下秀吉。俺の幼馴染だ。小中共に一緒だった奴だ。ココに居てアイツ大丈夫なのか心配だ……。まあ、守るけど。

「……土屋康太……。よろしくたのむ」

次に立ったのは土屋康太、通称：ムツツリーニ。コイツも秀吉や雄二と同じで親友兼悪友だ。特技が、盗撮という犯罪ギリギリの男だ。まあ、いい奴だよ？本当は……。てか……。女なんていねーじゃねーか……。

「島田美波です。よろしく」

……前言撤回、女は居た。島田美波、コイツよく秀吉達と一緒に居た奴だ。なんて、考えてると俺の番になった。

「小此木遼平だ。得意なことは合気道とギャンブルだ。よろしく。」

ふう、コレでよし！いい感じに自己紹介が出来たぞ！！さてさて次は……あっ！！！！

「吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでくださいね。」

「……ダアアーリーーン!!!!!!」「」「」

野太い声の大合唱。流石の明久でもこの呼び方は辞退したようだ。明久は俺の後ろだ……。コイツ俺に気付いてないな?……。まったく。明久が席に着いたとき後ろを向いた。流石に気づくだろう。

「……………ドッペルゲンガー??」

「明久……お願いだから、期待を裏切るな。頼むよ……。」

コイツは……。本当にバカなのか!!ようやく俺が本物と気付いたのかああ!つと言って驚いた。俺は化け物か!!

「遼平!!なななななな、なんで!?!なんでFクラスなの!?!」

「落ち着け、明久……。じゃが、ワシも気になるのう……。?」

離れた所に居た秀吉もなぜか、明久の隣にいた。うう……。言い訳できねえ……。でも、言ったら言っただで怒られるからな……。。(特に明久に)

「何々?吉井の知り合い??あ、ウチは島田美波。よろしく!」

騒いでる俺達の所に続々と悪友達+1が寄って来た。ムツツリーニ、写真を撮るのはやめろ。(島田を)

「あ、島田さんえつと^{ガラ}ry」あの、遅れて、すみま、せん……。」

『へ？』

突然の訪問者にクラスは静まり返った。そりゃそうだ。硬直している俺達に代わってヒョロ男がその影に話しかけた。

「丁度よかった。今、自己紹介をしているところなんです。なので、姫路さんもお願ひします」

「あ・・・は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします・・・」

姫路瑞希・・・・・・・・・・・・・・・・なぜ？

「はいつ！質問です！」

俺の列の一番前の男子生徒が一人が高々と右手を挙げる。多分コイツは、俺の言いたいことを言ってくれるだろう。

「あ、はいつ。なんですか？」

「なんでココにいるんですか？」

聞きようによつては失礼な事を言っている様に見えるが、本当だ。姫路は、学年上位の成績のはずなのに何でここに？（俺も人のこと言えないが）ん？たしか・・・試験のとき・・・姫路は・・・ああ！

「姫路、確かお前・・・熱が出たんじゃなかったか??」

「あ、は、はい。そうなんです。」

姫路は俺を見てビックリしたが、素直に肯定した。Fクラスのほぼ全員は、納得していた。

「あ、あの……なんで小此木君はFクラスに……？」

ギクリ！……一番聞かれたくない事を聞いてきやがった！！みんなの視線が俺に集中している。

「遼平……観念するんじゃ。」《ポン》

「秀吉……分かった、分かった……言いますよ。ったく……」

俺は両手を挙げて降参の意を表した。うう……そんなに見つめんなよ……。

「実は……だな……」

『実は……？』《ゴクリ》

「次回に、続く!...!」

『おい!...!...!』

第一話（後書き）

さあ、次回に続きましたね（笑）

まさか続くとは、私も分かりませんでした！！

いよいよ、Fクラス転入の謎が明らかに！？

そこまで深くは無いんですけどね。

第二話（前書き）

バカテスト第二問：次の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

小此木遼平の答え

『命を育む元』 (これを否定すると先生は人間ではありません)

教師のコメント

あとで職員室に来るよつた。

第二話

「実はだな・・・・・・・・・・・・・・・・」

前回に続き皆の視線は俺に向けられている……。万事休すか！？諦めかけたその時、俺に何か分かんないけど女神が俺に微笑んだ・・・・・・・・気がした。

「はい、良いですか皆さん・・・・自己紹介の続きをお願いします」

ナイス！ヒョロ男、今お前が女神に見えた！！！！ウップ・・気持ち悪い・・。なんて思っていると最後の生徒の番だ。最後は・・・・雄二だ。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「うーーーーっす、了解」

ヒョロ男に呼ばれて雄二が俺の席から離れて教卓に向かう。何でだろう？ゆっくりと教卓に歩み寄るその姿にはいつものふざけた雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えた。

「坂本君はクラス代表でしたね？」

クラス代表といっても、学年から集められた成績の低い集団だから何の自慢にもならない・・・・どこるかほぼ恥すべきことだろう。ところがそれを知っているはずの雄二は自信に満ちた表情で教卓に上がり、俺達の方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

「イエーイー！雄じーん！！ヒューヒューー！！」

「黙れ遼平、そして死ね頼むから」

ちえゝ何だよ冗談の利かない野郎だな……。雄二は気を取り直して咳払いをすると話し始めた。

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄二がゆつくりと、全員の間を見つめるように告げる。間の取り方が上手いせいか、全員の視線は雄二に集まっている。皆の視線を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

雄二の視線に教室の全ての視線が付いていく、雄二の野郎……。詐

「なんだお前ら、そんなだとこれから起こる事にも対処できないぞ」

「い、いや……なんか自分から言い出しといて凄いな〜って思
つてさ……」

明久が苦笑いを浮かべながら俺に言う……自分から言い出し
といて???ってどうゆう事だ???言ったのは雄二じゃないのか???

「どうゆう事じゃ、明久?お主は何もしとらんじゃろ?」

俺、同様に気がついた秀吉は明久に問いかけた。すると明久はもじ
もじしながら答えた。

「いや、だつて……あ、あまりに酷い設備だから如何にかした
いな〜……なんて……」

ああ、なるほど!!

「明久は、姫路は実力があるのにこんな醜くて汚い教室で学ぶのは
どうなんだろう?とか思つて雄二に相談したら以外にも雄二も乗り
気だった。つて言いたいんだろ??」

「なんで分かつたの!?怖い怖いよ遼平!!」

俺に思っていた事を当てられて動揺している明久。分かるに決まっ
てんだろ?なんせ俺等……。

「さすがじゃのう、お主らは。」

「みんなよく聞け！！」

ざわざわと学校に対する不満を述べていた奴等&俺達は、声のする方・・・教卓に立っている雄二に視線を向ける。雄二は自信に満ち溢れた顔に不適な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが・・・」

これから戦友になる仲間達に野性味満点の八重歯を見せ、

「・・・FクラスはAクラスに、『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

「ごめん・・・遼平・・・秀吉・・・」

「気にすんなよ、明久」

「そっじゃ、何とかなるかもしれんしっのう」

第二話（後書き）

今回でも語られないFクラスに入った理由（笑）

書いてると思ってますよ！

多分、3か4か5には語ります・・・きっと!!

では、お楽しみに~~~~~

第三話（前書き）

バカテスト第三問：以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 CaH_6 』

教師のコメント

簡単でしたね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は科学をなめていませんか。

小此木遼平 & 吉井明久の答え

『 $\text{B} \cdot \text{E} \cdot \text{N} \cdot \text{Z} \cdot \text{E} \cdot \text{N}$ 』

教師のコメント

素晴らしく息が合っていますね。

ですが、後で職員室に来るように。

第三話

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるのは嫌だ』

『秀吉がいたらそれで良い』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。そう、例えるならアリスブルドーザーぐらい酷い……。なんて考えてるとクラスの批判はヒートアップした。俺だけだろうか、雄二の額の青筋が見えるのは……………。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

俺だけが見えるかもしれない青筋を浮かべながら雄二は言いきった。

「はい！質問です！」

空気の読めない明久が、元気に手を挙げている。頼むから、空気を読んでくれ……。明久。

「いいだろう……。明h……。ゴミ虫野郎言ってみろ」

「間違っただけだから普通に呼んでよ！！ったく……。あ、あのさ、

「遼平、はいコレ」《ポン》

「おお、サンキュー明久」

「明久てめー、何でペンチなんて渡してんだ!!!」

さすが明久。俺のしたい事が分かってる〜!!!

そんな事をして約15分後……………。

「気を取り直して…………俺達にはこいつ等がいる!!!」

今度は指を指さない雄二。よし、学習するって大事だよな?だが、俺達は何なんだ?という疑惑の目を向けてくるFクラス一同。

『だからどうしたー!!!』

『小此木は分かるが、吉井はバカじゃないかー!!!』

『そつだそつだ!吉井は莫迦だー!!!』

「漢字の変換間違ってる奴に言われたくないよ!!!」

俺以外つまり、明久に不満が集中する。しょうがない、フォローしてやるか…………。

「いいかおm「こいつ等のタッグは認めたくはないが、もの凄い(遼平だけ)!!!」…おい」

「ねえ!いま、遼平だけって言ったよね!?!タッグなのに一人!?!」

「いつら……」

「簡単な奴らじゃのお」

「僕このクラスで頑張れるかな？」

こうして、本格的にFクラスの対Aクラス戦準備が始まった。

第三話（後書き）

いよいよDクラス戦ですね・・・。

長かった。

話の流れが遅くてすみません。

受験なので更新が遅れるかもしれないので、大目に見てください。

第四話（前書き）

誠にすみません……。

ど忘れしていて、投稿してませんでした!!

これからも……頑張ります???

うとこだったじゃねーか！！マジこいつは明久の幸せのために始末しなければいけないな…………。

「おい、遼平。明久以外に誰がいくつてんだ？」

雄二の問いに俺は教室を見渡す…………どうしよう…………みんな行けそうじゃん…………俺は取り合えず一番最初に視界に映った、須川を推薦してみた。もちろん、須川も最初は拒否していたが『丁寧な話し合い』の結果行くと自ら言ってくれた。嬉しいね〜心の澄んだ少年を見るのは…………フフフ。

「お前…………俺より性格歪んでるぞ……………」

「そんなに褒めんよ！（お前もいつかああなるぞ）」

「さ、さあ、い今から、み、ミーティングを行うぞ」

他の場所で話し合いをするつもりのように、雄二は扉を開けて外に出て行った。あの野郎…………逃げやがったな…………まあ良いかいつか必ずその日はやってくる…………フハハハハハ！！！！

「……………遼平…………お主……………」

「遼平……………」

気が付くと秀吉と明久が俺を見ている…………見るな！いや、見ないでください！！マジ、見ないでください！！

「何かあったらすぐ言っつてね（言っつのがじゃぞ）？」「」

「ありがとう……でも、その目はやめて（泣）」

俺は明久と秀吉のもの凄く穏やかな目に見つめられながら雄二の後を追った。

校内を歩いていると、先頭の雄二が屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出た。雲一つない空から眩しい光が差し込む。春風とともに訪れた陽光に、風ではためく姫路のスカートに注視しているムツツリ一二を除いて、俺達は全員目を細めた。

「須川君、大丈夫でしょうか？」

「心配する事はない。須川だしな・・・」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「午後には開戦予定だよな？」

「ああ、須川が言えてればの話だけど・・・」

俺たちもそれにならって各々腰を下ろす。

「それじゃ、先にご飯ってことね？」

「そうなるね。じゃあ・・・遼平！！」

「うむ。遼平、頼む」

了解と言いながら俺は自分のカバンから弁当を出した。

「これが・・・明久」

「わ~~~~い!!!お弁当~~~~」

「これが・・・秀吉」

「うむ、かたじけないの〜遼平」

「つで、俺がこれつと・・・どうした?」

弁当を分け終わると姫路と島田が俺を見ていた。なんかヘンなことしたっけ??

「え・・・もしかして、そのお弁当・・・小此木が作ったの??」

「ああ、そうだけど?」

俺がそう答えると姫路と島田は信じられないといった目で俺を見た。なんか、くすぐったい視線だ。明久は早速弁当にありついている・・・しつかり噛んでるな・・・よし!

「それじゃあ、俺も頂きまーす」

「ワシも頂こうかの」

ほんの少しだけ会話が途切れた。やっぱり弁当にみんなの関心が寄っている・・・つま、当たり前だけどな。そう言う俺もモグモグと弁

当の中身を減らしていった。

それからしばらくして……全員の弁当が空になった。

「うっし、会議を始める」

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでいくならEクラスじやろっし、勝負に出るならAクラスじやろっし？」

「そっいえば、確かにそうだよな」

「何か考えでもあるのか？」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えですか？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

成績でクラスを分けられているので、Eクラスは当然俺達がいるFクラスより振り分け試験の点数は良い。戦うまでもないか……

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな

い。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えーっと……」

明久が雄二に言われたとおりに俺達を見回す。

「えっと……美少女が2人・女の子が1人・ムッツリが1人・僕の親友が1人と天然危険物野生全開猥褻男が1人いるだけだよ？」

「誰が美少女だと!?!」

「「いやいや、お前（お主）は天然危険物野生全開猥褻男だろ（じやろ）!?!!」」

「……（ポツ）」

「ムッツリニ、お前はムッツリだ……」

大体分かるが美少女は姫路と秀吉だろう……。女は島田、ムッツリはムッツリニ（名前で分かるうぜ……）天然……打つのめんどくさっ!?!……コホン、猥褻ヤローが雄二……俺は勿論・親友だと思っ……結構うれしいな……（照）

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。こいつら……。

「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。

Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無い
ってことだ」

「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

明久の疑問も尤もだが……なるほど……なるほど……。

「モチベーションのアップか……」

「さすがに気付いたか……遼平」

「気分的に盛り上げるってこと??」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ?それに、打倒Aクラスの作戦には必要なプロセスだしな」

なんだか分からんが、雄二の頭の中では色々な考えが渦巻いている
みたいだ……。なんかムカつくな……。俺より数倍頭悪いくせに……。

「……あのさ……吉井……」

「ん?どうしたの?島田さん」

島田が覚悟を決めた顔で明久に何やら問いかけている。何であんな
に険しいんだ??

「吉井と小此木って何でそんなに仲がいいの??」

「「へ?」」

異句同音とはこのことだろう・・・俺と明久の声が重なった。

第四話（後書き）

はい。

続きが気になりますね！

では……次回に乞うご期待！！！！

第五話（前書き）

明久（以下：明）「吉井明久と〜〜〜」

遼平（以下：遼）「小此木遼平の〜〜〜」

明&遼「放課後居残り補習室〜〜〜！！！！！！」

イエーイ！！ パフパフ パラリ〜ラリ

明「いよいよ始まったね！放課後居残り補習室 略してバカ部屋！！」

遼「なんだ、その略し方！？酷いぞ！！」

明「しょうがないよ遼平。作者のネーミングセンスは酷すぎるんだもん・・・」

遼「ああ・・・あれか・・・犬に名前付けたとき最初に出てきたのが『バツ八』だったよな・・・可哀相に・・・」

明「ホント・・・可哀相に・・・」

遼「さて、このコーナーは『俺とバカと召喚獣』についての読者からの質問&意見を紹介していくコーナーだぜ！！！！」

明「どんな素朴な疑問でもいいのでドンドン送ってくださいね〜！」

明&遼「お待ちしてます!!!」

明久が必死に弁解している。一方、姫路と島田は驚いて声が出ないようだ……なぜ??

「え……で、でも……小此木は木下と……え??」

「あゝそれかゝそこがややこしいんだな……うん」

この話はややこしいから話すの面倒なんだが……なんて考えてると明久が縋り付くような目で見つめてきた。

「もう、これ以上……面倒事は嫌なんだよ……」

なんて不憫な子なんだ……。チクシヨー!!前が、前が霞んできやがったっ!!しょうがないので俺は説明を始めた。

「俺と秀吉は勿論幼馴染だが、明久とも幼馴染だ。あのだなー、俺と明久はアパートの部屋が隣同士でな小さい頃からよく遊んでたんだよ。」

「で、遼平は北、僕は南の小学校に行ってたから遼平とは別々だしかも、秀吉に会えなかったんだ……」

「うむ、この学園入ってから知り合ったんじゃない」

「へ〜〜そうなんだ(ですか)」「」

二人とも俺の(俺達の)説明に納得してくれた様だ。……よか
t t

「ウチ等より先に木下に会いたかったのね?吉井?」ゴゴゴゴゴゴ

雄二への制裁も済んだことだし・・・明久を助けてやるか・・・
・出来る限り。

「おい、島田。」

「小此木ちよつと待ってて・・・コイツを沈めてから聞くわ」

島田は明久にお得意の腕ひしぎ十字固めをきめている・・・ホントにこいつは女なのか??

「そんなに俺が明久に弁当を作るのが嫌なら・・・お前が作ったら？」

「うええ!? ウウウウウ・ウチ・・・ウチが!？」

島田は俺の言葉に驚いて明久にきめていた技を中断した(正確には明久を放した)。

「それもそうじゃの、島田が作れば全て解決じゃ」

「でででででで・・・でも!!!! そ、そんなのkkきよきゅに!!!」

島田がテンパっていると俺達の騒ぎを隅のほうで聞いていた姫路が手を挙げた・・・なんだ??

「あ、あの・・・わ・・・私が作って来ていい、良いですか・・・？」

「……彘？」

最初に気が付いたのは明久だった。それもそうだろう……自分が好意を寄せている姫路がお弁当を作ってくれるなんて言ったのだからな……。

「ほ……本当にいいの？迷惑？」「迷惑なんかじゃありません！！」
え……あ、うん……」

明久の問いをももの凄いい勢いで否定した姫路……恋する乙女は強いな……うん……。

「……ふうん。瑞希つてば吉井 だけに作って来るんだ」

面白くなさそうな島田の言葉。まあ……当然といっちゃー当然なんだが……。すると姫路は慌てて首を振りだした。

「あ……い、いえ！み、皆さんにも……よかったら……」

「え？俺達もいいのか？めいW「迷惑じゃありません！！」あ……はい……」

さっきの様に俺の言葉を全力で否定する姫路……。

「あ……じゃあ、頼むわ」

「……俺も」

「じゃあ・・・ウチも！」

雄二・ムツツリー二・島田の三人は姫路の弁当にありつくらしい・・・
秀吉は・・・???

「木下君は・・・どうしますか?？」

「うむ・・・ワシは遼平の弁当を貰うとするかの〜姫路の負担が大
きいからの・・・よいか?」

「ああ、俺はどっちでも良いぜ?」

「じゃあ、遼平と秀吉は自分。俺達は姫路の弁当で・・・いいな?」

「」「」「うん(はい)」「」「」

ようやく一段らくしたな・・・ふう・・・ん?俺た
ちココに何しに来たんだっけ?

「そつと決まればいよいよ作戦タイムだな」

「「あ、そうだった」「」

危なかった・・・弁当の件で完全に忘れてた・・・。

打倒Aクラス。

荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能な絵空事かもしれない。

でも、俺には分かる。

この夢は夢なんかじゃ終わらない事を……。

「それじゃ……作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺達の勝利への作戦が紡がれた。

俺達は……必ず……勝ってみせる!!!

第五話（後書き）

はい、いよいよDクラス戦ですね・・・。

遅いな（笑）

前書きの『バカ部屋』に対する質問や、感想などもお待ちしております。
まゝです。

今後ともよろしくお願いします。

第六話（前書き）

明「吉井明久と〜〜〜」

遼「小此木遼平の〜〜〜」

明&遼「放課後居残り補習室〜略して・・・バカ部屋!!!」

イエーイ!!! パフーー ドンドン

明「なんと! 質問が送られてきましたー!!!」

遼「送ってくれてのは・・・損長さんです! ありがとー!!!」

明「さあ、質問に行くよ〜!!!」

【幼馴染3人組に質問】

お互いに初めて顔を合わせたときの第一印象は?

明「ん〜〜? 僕は・・・遼平が優しそうだったかな??」

遼「おお・・・て、照れるな・・・秀吉は??」

明「可愛い子だな〜って」

遼「俺は・・・秀吉がやつぱ可愛いで、明久が・・・ツフ」

明「何その『ツフ』って!??」

第六話

さてさて所変わって只今Dクラスとの戦いの真っ最中。

「小此木と吉井！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポーにーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された島田。秀吉が敵と交戦か・・・まあ、大丈夫だろう・・・たぶん・・・なんて考えてると隣にいた明久がブツブツとなにやら考えている。

「・・・ああ、胸か・・・」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」

「島田、お前は誰を倒すつもりなんだ・・・」

こいつ等は目を離すとすぐにコレだ・・・はあ・・・自信が薄れてきた。

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないとー!!」

「まあ、そうね・・・覚えてなさい・・・」

「まずは、俺達の部隊の目的を確認するぞ」

今現在前線にいるのは秀吉率いる先攻部隊で、そことFクラスとの中間辺りに俺達がいる中堅部隊が配置されている。引き受けた覚え

はないが、なぜか俺が部隊長になっている。たぶん（限りなく絶対）
雄二の嫌がらせだろう・・・殺す。

「お前ら！！耳を澄ませ！！」

「「「「「「「「「「「「「「」

ホラ聞いてごらん前線部隊の戦闘の様子を・・・。

「さあ来い！！この負け犬が！！！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだ！！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終
戦までの時間たっぷり指導してやる！！！」

「嫌だ！や、やめろ！！い、いやだああああああああああ
ああああああああああ！！！！！！！！！！」

よし、前線部隊の様子は分かったな。

「野郎共・・・・・・・・分かっただろ？」

「皆に一つだけ伝えておくよ・・・・・・・・」

この戦いは行きぬかなきゃいけないんだっ！！絶対に！！！！！！だから………。

「コイツは駄目だと思っただら見捨てる（るんだ）！！！！！！！！以上！！！！！！」

「この意気地なし！！」

明久が島田の殺人パンチ？（チヨキだったけど）にやられた……。哀れ明久……。

「目が、目があっ！！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！！アンタは仮にも副部隊長でしょ！！仲間を見捨ててどうすんのよ！！！！」

「島田、目覚める前に目が潰れたんだが？？あと、見捨てるじゃない……捨てるんだ！！！！」

「吉井よりアンタを殴った方がいいみたいね………」

島田が指の関節を鳴らしながら近づいてくる……。正直に言おう……。……調子に乗りました！！！！

「いいあんた達？ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょ？あいつ等が戦闘で消耗した点数w……。あれ……。小此木？吉井……。何処いったのよおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

島田の長くなりそうな話を途中で逃げ出してきた俺と明久だったが・
・・・・。

「ねえ．．．遼平．．．」

「なんだ．．．明久．．」

何と言うか．．．つまりだな．．．もの凄い．．．ヤ
バイ。

「これって．．．ピンチ？」

「ああ、世間で言うと絶体絶命ってところだな．．」

俺達は、Dクラスに囲まれていた．．．。

「ごめん、明久．．。俺がこの道を選んだばかりに．．!!」

「き、気にしないでよ！たぶん島田さんといってもこんな感じだった
と思うしー!!」

不甲斐ない．．くそ！マジムカつくんですけどー (?!?) (己の

失態に涙ぐむ俺を他所にDクラスの連中は飛び掛ってきた……この怨み全て貴様等にぶつける！！

『奴等は二人だ！やっちまえー！！』

『 試獣召喚っ！！』

相手は五人……久しぶりの明久とのタッグ戦か……いけるかな？？

「明久……用意は良いか？」

「もちろん」

俺と明久はおなじみの召喚ワードを叫んだ。

「 試獣召喚っ！！」

戦闘開始だ！！

一方、中堅部隊は……

第六話（後書き）

ようやくバトルまで来た・・・長かった。

質問の方も待ちしております!!

第七話（前書き）

明「吉井明久と~~~~~」

遼「小此木遼平の~~~~~」

明&遼「放課後居残り補習室~~~~略して・・・バカ部屋!!」

イエーイ!! ドンドン パフパフ~~~~!!

遼「じゃっ!サクサク進めていくぞ!!まずは・・・これ!!」

【秀吉に質問】

明久は分かるとして秀吉がお弁当をもらう事になった馴れ初めは?

明「あ、僕も気になっていた・・・たしか、一年のときもだったよね??」

遼「今回は秀吉が居ないから俺が話すけど・・・実はだな・・・」

明「じつは・・・」（ゴクリ）

遼「秀吉には姉貴がいるだろ?」

明「うん。たしか・・・優子さんだっけ??」

遼「アイツは恐ろしいほど料理が下手なんだ・・・」

明「ええ!?ほ、本当!!考えられないな・・・」

遼「中学の頃、アイツが秀吉に弁当を作ってたんだが・・・壊滅的にやばくてだな・・・しょうがなく俺が秀吉のを作ってたら慣れちまっつて今の状況だな・・・」

明「秀吉は料理できるんでしょ??」

遼「いや、たしか・・・駄目だったと思う・・・」

明「へ〜・・・あつ!もう、こんな時間!!早く出ないと!!」

遼「うお!!やべっ!鉄人が来る時間じゃねーか!!」

明「という訳で、今日はここまで!」

遼「次回もよろしくな〜」
『小此木!吉井!!』
ツゲ!て
鉄人!？」

バタバタバタバタバタ

『待てええええええええええええええええええ!!!!!!!!!!』

「「待てるかあああああああああああああ!!!!!!!!!」」

第七話

「試獣召喚っ!!」

俺と明久が叫ぶと同時に足元に幾何学的な魔方陣が現れる。教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。そして、姿を見せる俺と明久の召喚獣・・・現れた俺の召喚獣はまるでバーテンダーの様な服を着ており、ビリヤードのキューを持っていた。

「あ、やっぱり・・・遼平らしいよね、ソレ」

「鉄人には怒られるけどな・・・」

明久の召喚獣にも目をやる。改造学ランに木刀・・・戦う気があるのか??

「さて・・・邪魔者は補習室に行ってもらいましょうか!!」

『て、てめー!!おい!やっちまえー!!』

『おおー!!』

「いくぞ!明久!!」

「了解っ!!」

明久の召喚獣は俺のかけ声と共に敵に突っ込んでいった。

『バカが、一人で突っ込んできてもお前なんか簡単に「ほいっさ!」

「な、なに!?!」

俺の召喚獣は懐からビリヤードの球を出し、敵（&明久）めがけて高速で打ち出す。流石に明久もろとも倒す事は無いと考えていた敵は驚いている。

「ツク!ひ、怯むな!!奴の召喚獣は観察処分者じゃない!真っ直ぐ来るはずだっ!?!」

「流石はDクラス・・・でも、ちよつと惜しいかな・・・オラッ!?!」

カコン カコン カカカカカカ カコン ドゴッ! バキッ!

「『『『『なっ!?!』』』』」

驚くDクラスの奴等。当たり前だろう・・・普通の召喚獣は相手の召喚獣以外には触れられない筈なのに、俺の召喚獣の打ち出したビリヤードの球は壁・床・柱に当たり跳ね返っている。

「なんでだ!!お前!観察処分者なのか!?!」

「んなわけねーだろ、腕輪だっつーの・・・さっさと逃げないと死ぬぜ?」

「だ、だが!そんな事したらお前の仲間も戦死す!」しねーよ!?!」

カコン カコン カカカカカカ カコンガゴッ ドゴッ!!

「吉井……小此木……クロス……」

俺達にシャープンを放ったのは某戦闘漫画の如く異様にオーラを放っている島田だった。あの気の高まり方はやばいぞ？

「お前等がいなくなったせいで中堅部隊はものすご〜〜〜〜
〜〜〜〜く大変だったらしいぞ？ん？」

「いや、大変だったのは謝るから島田をどうにかしろ！！！」

「僕は明日の朝日を拝めるかな……いや、明日が来るかな……」

「明久あああああああ！！！！戻って来い！！！！！！」
死んだ魚の様な目になった明久を揺さぶる。こんな状況で1人にしないです！！くそ！！こっとなつたら……

「逃げるが勝ち！！」 《ッダ！！》

俺は明久を担いで走り出す。

「あ！待ちなさい！！小此木iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！」

「ハハハハハ、がんばれよ、遼平」

「雄……貴様はいつか殺す！！」

こうしてその後目覚めた明久共に島田から逃げる『リアル逃走中』が始まった……。

なんでこうなるんだ……（泣）

Dクラス戦
えは無かった）

Fクラスの勝利（ただし、設備の入れ替

第七話（後書き）

作者はバトルシーンが苦手です・・・

うう・・・どうしたらいいんだあああああああ！！！！

姫路さんに国語を習いたい・・・

第八話（前書き）

今回はバカ部屋はお休みです。

遼平が・・・ゴッホン ウホン

と、とにかくお便りまってまっす!!!

第八話

島田とのリアル鬼ごっこを終えて翌朝、いつも通り明久を起こしに行く・昨日は忘れ物を取りに行つて一緒に帰らなかつたからな・。

ピンポーーーーー

「おーい、明久あ！！学校にいくぞ〜〜」 《ガチャ》

「ふあ・・・うん・わふあた・・・ZZZZ」

ドアを開けた明久はちゃんと制服は着ているが半分目覚めていない・夜更かしでもしたのか？

「お〜い・・・明久くん・・・駄目だこりゃ・・・しょうがね・・・ほいつ！」

玄関で眠つた明久を担いで俺は学校へと向かつた・・・俺・・・オカンかよ・・・たしか、今日は昨日の戦争で消耗した点数を補給する為にテスト漬けのはずだ。大丈夫か・・・明久・・・。

「ちゃ〜〜〜ッス！！おっは〜〜〜」

教室の戸をガラガラと開ける。相変わらずの畳とボロ卓袱台。Dクラスの設備がもったいなかったんじゃない・なんて考えてしまう・その通りだが。

「おう遼平。時間ギリg……何してんだ……お前??」

「俺が聞きたいっつーの……なにしてんだ?」

「見りゃわかんだろ?勉強だ、べ・ん・きよ・う」

既に到着していた雄二が隣の卓袱台で胡坐をかいている。持っているのは英語の教科書だ。なるほど……最後の悪あがきってやつか。俺はとりあえず明久を隣に寝た。……幸せそうだな……明久・夢の中だけ。

「で?話によるとDクラスの設定……換えなかったんだってな?」

「ああ。皆にもきちんと説明したからな暴動は起きなかった」

「へーあいつ等が……ねえ……」

Fクラスの連中が言うことを聞いたのは昨日の雄二の働きを評価してだろう。あんなに簡単にDクラスが落とせると分かった今、Dクラス程度の設備には興味がないってところだろう。

「それよりいいのか?」

「何がだよ?」

「明久だ。テストがそろそろ始まるぞ」

雄二に言われて時計を見るとテスト開始十分前、そろそろ起こさないと……。

「明久くくくく起きろくくくテストだぞくくくく」

「うくくくくくくくくくんくくくくくくZZZ」

優しく起こそうとするが、明久は目覚めないくくくくならばくくくく最終兵器。

「ボソボソボソボソボソ」

ボソ」

《ガバツ！！》

「起きましたっ！！起きましたからっ！！！！」

俺の言葉が終わると同時に飛び起きる明久。その様子を何とも言えない表情で見る雄二。

「なに言ったんだくくくくくく遼平」

「幼馴染の特権」

「えくくくくくくくくく学校？？なんで？」

「俺が連れてきたんだよくくくく一時間目は数学のテストだぞ」

「あ、うんくくくく遼平ありがとうくくくくふあ」

大きな欠伸をする明久。

「ほんじゃくくくくがんばれよ！！」

と言い残し、俺は自分の席へと向かった。

姫路はもじもじしながら明久の方を見ている。この前の約束……
・ああ……。

「姫路。もしかして……弁当か？」

「あ、はい！作ってきました！あの……迷惑じゃなかったらどうそっ！」

と、身体の後ろに隠していたバックを出してくる。うん、姫路は良
いお嫁さんになれそうだな。

「迷惑じゃねーぞ？なあ、明久」

「うん！姫路さん、ありがとね！！」

「え、あ、こここちらこそありがとうございます！！」

顔を真っ赤にして頭を下げる姫路。初々しいな。最近の子供は……。

「む。瑞希ってば、意外と大胆なのね……」

そんな二人を端から睨んでいる島田。恋する乙女は無敵艦隊ってな。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上で
も行くかの」

「それもそうだな」

こんな腐った畳と野郎の臭いしかない場所で食うのもなんだしな・
・ーつか、嫌だ。

「そうか。それならお前ら先に行ってる」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買って来る。昨日の礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！1人じゃ持ち切れないでしょ？」

なるほど・・・好感度アップ作戦か・・・流石だな。

「じゃあ、先行ってるぞ」

「後でね」

「すまぬな」

「・・・・・・・・やっと思えた」

「すみません」

雄二と島田は財布を持って教室を出て行った。一階の購買の自販機
に行っただろう。

「じゃあ、俺たちも行くか」

「うん」

姫路の抱えていたバツクを受け取り、屋上まで歩く。結構重いな。
どんだけ入ってたんだ？

「天気良くてなによりじゃな」

「………降水率0%」

屋上へと続く扉の向こうは雲一つない青空が広がっていた。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路がバツクからビニールシートを取り出す。だからあんなに重かったのか……用意周到だな。

「お〜良い風だな〜」

「………（コクリ）」

ビニールシートの上に足を投げ出す。日差しと風が気持ち良い。

「あの……あんまり自信が無いんですが……」

姫路が弁当の蓋を取る。

「………おお……」

俺達は一斉に歓声をあげた。

凄く旨そうだな。から揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きなど、定番のメニューが弁当の中に詰まっている。

「うむ。遼平の弁当にも引けを取らないくらいじゃの……」

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

「……………(ヒョイ)」

「あっ！ムツツリーニの野郎!!」

動きの素早いムツツリーニがエビフライをつまみ取った。

そして、流れるように口に運び

「……………(パク)」

バタン

ガタガタガタガタガタ

え？

第八話（後書き）

火曜サスペンスですね。

姫路さんの手料理食べてみたいです（笑）

え？やめた方がいい？

大丈夫、作者の友人の手料理もテポドン並みの破壊力ですから慣れます！！

第九話（前書き）

明「皆さんに大切なお知らせでー！ー！すー！！」

遼「実はだな．．．ココの作者は今受験なのにカタカタこの小説を打っていて」

明「親に『こんなものばっか打ってんじゃないわよ！！！』ってマジギレされたらしいんだ〜〜〜」

遼「というわけで、しばらくは更新が出来なくなるけど．．．」

明「僕達を見捨てないでね??」

明&遼「これからよろしくお願いします〜〜〜！！！」

第九話

俺達は目の前で起きている光景に愕然とした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺と明久と秀吉は顔を見合わせる。

「わわっ、っ、土屋君!？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・(ムクリ)」

慌てていた姫路の前でムツツリーニは起き上がった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・(グツ)」

そして、姫路に向かって親指を立てた・・・多分、『凄く美味しいぞ』と伝えたいのだろう・・・。

「あ、お口に合いましたか？良かったです!!」

ムツツリーニの言いたいことが伝わったのか、姫路は安心した様に笑った・・・でも、俺達は笑えない。なぜなら、いま立っているム

ツツリー二の足が初期微動のように震えているのを見たからだ・・・
。産まれたての羊かつ！！

「良かったら、ドンドン食べてくださいね」

姫路が笑顔で勧めてくる。正直に言っぞ・・・何があっても食べたくないっ！！！！

(明久・・・秀吉・・・どう思う・・・)

姫路に聞こえないくらいの小さな声で二人に話しかける。

(・・・どうって・・・そりゃ・・・)

(・・・演技では・・・ないの・・・)

(じゃあ、一つ聞く・・・コレを食べて生きていられると思うか？)

(五分五分だね／じゃな)

表情は当然笑顔のままだ。姫路に知らせるにはあまりにも過酷過ぎるからな・・・ムツツリー二を殺ってしまったなんていえないな・・・。

(明久。お前、身体に自信はあるか？)

(外は頑丈だけど、身体の中は自信が無いよ・・・特に胃はね・・・)

(ならば、ここはワシに任せてもらおう)

俺の隣で勇気ある秀吉の台詞が聞こえた。

(待て！お、落ち着け！)

(そ、そうだよ！危険すぎるよ！！)

(大丈夫じゃ。ワシは姉上のおかげで存外頑丈な胃袋じゃしな。コ
レくらいなら・・・大丈夫じゃ 多分)

(アレは、アレで危ないがコレは尋常じゃない！！下手したら死ぬ
ぞ！！)

(安心せい。ワシを信じてm (

外見は美少女でありながら、誰よりも男らしい台詞を言おうとした
ところで、

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二登場。

「あつ、ま、待て！！それは！！」

「あつ、雄二」

俺と明久が止める暇も無くあの多分残酷な結果を起こすであろう卵
焼きを口に放り込んだ。

パク
タガタガタガタガタ

バタン

ガシャンガシャン、ガタガ

第二の犠牲者が出てしまった。

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの!?!」

遅れてやってきた島田が雄二に駆け寄る。 なんて現場に血が流れなきやいけないんだっ!!

「. 遼平 コレは 」

「どうやら 本物だ 」

ムツリーニ同様激しく震える雄二を見下ろす。すると、雄二は倒れたまま俺と明久の方をじっと見て、目でこっぴど訴えていた。

「毒を盛ったな」と。

「残念だが、毒は盛ってない 姫路の実力だ 」

『もしも盛ったなら、雄二は今頃アツチだよ』

俺と明久も目で返事する。なんだかんだ言いつつも一緒に行動している俺だからこそできる技。こういう時は凄く便利だ。

「あ、足が……攀つてな……」

姫路を傷つけないようにウソをつく雄二。そんな雄二を温かい目で見る明久……なぜ??

「え……でも……坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情のわかってない島田が不思議そうな顔をする。つち……排除するか……。

「と、ところで島田さん」「おい、島田」「遼平!?!」

「ん?なによ、小此木??」

「ほら、食ってみるよ。雄二の倒れた理由が分かるぜ……」

「ちよっ!りよ、遼平!何てこと言うんだよ!?!」

明久が慌てて言い返してきた。

「へ?瑞希のお弁当でしょ?なんで……まあ、いいわ。いただきます
す!」

「きゃああああああああああああああああああああああ
！！！！」

屋上に響く阿鼻叫喚。青い空の下、俺達は何をしているんだろう。
。。。。。

「ううう。。。私のお弁当で皆さんを。。。ううう。。。」

「でも、凄いで？あの、坂本雄二を倒したんだからな」

「はづー！！うう。。。うう。。。」

「フォローになっておらぬぞ。。。遼平」

取りあえず倒れた島田を保健室に運び、復活した雄二とムッツリー
ニを交えて今後の事を話し合っていた。

「そつえば雄二、次の目標って。。。なんでBクラスなの？？」

「ん。。。俺も思うんだが、ココはAクラスじゃないのか？？」

俺達の目標はAクラスだ。通過点に過ぎないBクラスを相手にする
必要はない筈。

「正直に言おう」

雄二が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスに勝てやしない」

戦う前から降伏宣言。雄二らしくない……だが……。

「一理あるな……俺や姫路がいてもアイツは厳しいからな……」

「

アイツ……霧島翔子。アイツの力は俺よりちょっとだけ上だ（こ
こ重要）一対一ならまだしも、他の奴が手を出さない可能性は極め
て低い。

「じゃあ、最終目的はBクラスに変更ってこと??」

Aクラス程じゃないがBクラスの設備も立派過ぎるほどに立派だ。
Fクラスの奴等は不満じゃないだろう。

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「ハッキリ言いやがれ」

《バキヤッ!!》（雄二に裏拳を決める音）

「ぐぼらばっ!!……」

「さつさと話せ。この天然危険物野生全開極悪非道のホ王野郎が！」

「読みにくっ！！読みにくいよ、遼平！！」

「しかしじゃの……遼平。今の攻撃で坂本がのびてしまったぞ？」

秀吉に言われて横を見ると、本日二度目の気絶を体験している雄二がいた。

「チツ、浅かったか……」

「何が！？何が浅かったのっ！！」

「しかしBクラスと戦うにしても今日はテストじゃからな……」

「それだと……明日ですね？」

立ち直った姫路が答える。

「じゃあ……宣戦布告を言いに行く奴は……須川でいいか？」

『『『異議なし（じゃな／です）』』』

こうして、大事なところを省いてサクサクと作戦会議は進んでいった。その後、目覚めた雄二をもう一度気絶させて、須川と丁寧な話し合いをしてBクラスへの宣戦布告使者になってもらった。

「くあ~~~~~やっと終わった~~~~!!」

「明日はBクラス戦だね・・・」

「まあ、なんとかなるだろう？」

「・・・そうだね!!」

第九話（後書き）

受験のために更新が出来ませんが、うちの子をよろしくお願いします。

第十話（前書き）

明「吉井明久と~~~~~」

遼「小此木遼平の~~~~~」

明&遼「放課後居残り補習室、略して・・・バカ部屋!!」

ドンドン パフ~~~~~ イエーーーーーイ!!

明「う~~~~~懐かしい!!懐かしすぎるよ!」

遼「ホントだな~~~~ココ2回はお知らせだとか・・・」

明「遼平がd「ゴホンゴホン」?どうしたの?」

遼「さ~~~~お便りのコーナーだ!!」

【遼平に質問】

玲さんや優子との仲はどんなですか?

遼「企業秘密」

明「漢字四文字で終わらせないでよ!」

遼「しょうがねーだろ・・・迂闊に話すとネタバレになるし・・・」

明「うん・・・まあ・・・しょうがないよね?」

遼「という訳で、質問くれた擅長さん……スマン!!」

明「質問の答は、物語りに出てくるからね?」

遼「ハイ!質問終わり!!」

明「え?お便り少なさ!!ジャンジャン送ってね!!」

遼「マジ頼むぞ!!」

明&遼「お待ちしてま……す!!」

「あ、うん！」

「承知！」

「いや、その必要は無い」

立ち上がり教室から出ようとしていた俺達を雄二が呼び止めた。必要ない?? Why??

「遼平……お前はココで待機してろ」

「え?なんで遼平だけ？」

「そうじゃぞ? 姫路と共に点数の高い遼平が居た方が良いはずじゃが……??」

雄二の『俺だけ待機発言』に異議を唱える二人。確かに俺だって野郎共をボコボコ……補習室に送りたい。

「何か考えがあつての事だろうな……?」

「ああ、勿論だ……今、お前が出るとややこしい事になる」

珍しくシリアスモードの雄二。流石にココまで言われちゃしようがねーな……。俺は明久と秀吉の方を向いた。

「フー訳だ……。俺の居ない間、前線を頼むぞ?」

二人は互いに顔を見合わせてニヤツと笑い俺の方に向き直った。な、

何だ???

「じゃあ、貸し一つだね!」

「何を頼むか楽しみじゃの〜〜」

「ハア!?か、貸しつて、ちよつ、おい、明久!秀吉!俺そんなのしr《ガラガラ ピシャ!》おいしいいい!!!!」

俺の話最後まで聞かずに二人は渡り廊下戦へと向かって行った。

「流石の遼平でもあの二人には勝てないってか」

「……………否定はしない……………」

雄二がニヤニヤと笑っている。いつか……………絶対にクロス!!なんてやりとりをしているとドタドタと足音が聞こえた。どうやら、こつちに向かつて来る様だ。誰だ??

「さて、遼平……………お客さんの御出ましたぞ」

「はあ??ちよつと待てよ……………お客つて《ガラ》……………はい?」

教室の戸が開いた先に居たのは……………Bクラスの連中だった。いやいや、まてまて……………なぜ?まさか渡り廊下戦が破られたんじゃ……………!?

「お早い御出ましたな、え?根本の考えか?」

『だ、だったら・・・だったらどうすんだよ!!』

「どうもどうもねーよ・・・止めるだけだ」

『チツ、だから嫌だったんだよ・・・』

『早く済ませて帰るぞ!!』

『『おお!!』』

「・・・どうゆづこと?」

俺を置いて雄二とBクラスの連中は話を進めて行く、もちろん訳の分からない俺はその話を聞いているだけだが・・・。

「遼平」

訳の分からない話についていけず窓の外を眺めていると雄二に呼ばれた。振り返るとそこにはお馴染みのブサイク・・・雄二の極悪非道な笑みがあった。

「こいつ等をココから追い出してくれ、頼んだぞ」

「ちょっと待て、理由を説明s「秀吉の机を探りに来たらしい」貴様等アアアアアアアアアアアア!!!!」

秀吉の机を探りに来ただと!?なんて・・・なんて奴等なんだ!!
クロス・・・うちの娘(?)に手を出す奴はブチ殺す!!!

『お、おい!!!!、誤解だ!!!!』

『そ、そうだ！！俺たちは根本に頼まれて！！』

『根本、根本が悪いんだ！！』

『根本が全て悪いんだよ！！！！』

必死に弁解をするBクラスの連中・・・問答無用！！俺は懐からスタンガン（ムツツリーニ特性カスタマイズVer.）を取り出し連中に歩みだす。

『やめ、止めてくれ！！！！』

「フフフ・・・・・・勿論・・・・・・実行に決まってるだろー
があああああああああああああ！！！！！！」

『『『ぎゃあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああ！！！！』』』

この日一番の悲鳴がFクラスから上がった。

後にあるBクラスの生徒が『Fクラスには鬼神が居る！！』と語っていた。

「根本か・・・・・・・・厄介だな・・・・・・・・多分」

「用心していればどうってことないがな・・・」

Bクラスの連中を丁重に退けた俺達は卓袱台を挟んで座っていた。須川からの報告によると、渡り廊下戦は激戦を極めており姫路が居ないと危なかったらしい・・・あと、島田が人質に捕られたが明久のアイデアで事なきをえたらしい・・・ほんの少しの命が散ったが・・・・・・・・。。。

「明久とかなら心配はないが・・・・・・・・」

「問題は姫路なんだよな〜」

「今回の攻撃の要でもあるからな・・・」

俺達が姫路の事について話していた時だった。

ドタドタドタドタ　　バタバタバタバタバタ
バンツ！！

勢いよくFクラスの戸が開かれた。また、Bクラスの連中か??なんて考えていると秀吉が姿をあらわした。

「大変じゃ!!!明久が・・・・・・・・明久が・・・・・・・・!!!」

「明久がどうした!!!まさか・・・・鉄人の魔の手に!?!」

「いや、それは無いと思うが・・・・・・・・」

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？ムツツリーニ」

「……計画は狂いは無い。しかし、被害は大きい」

ムツツリーニがこちらの被害を書いたメモを読み上げる。これも予想の内だが、こちらの被害もかなり大きい。渡り廊下戦も圧勝に見えるがこちらの持てる力を全て注いだ結果だ……決して良い状態ではないだろう……。

「ハプニング（襲撃）はあったが、今のところは順調ってところか」

「まあな」

だが、油断は出来ない……相手はあの根本恭二だ。誰かとは言わないが、手を出してくるだろう……。

「……（スッ）」

「ん、どうしたの？ムツツリーニ??」

ムツツリーニが手を挙げている。珍しい事もあるもんだな……ムツツリーニが手を挙げて発言するなんて。今回のムツツリーニの仕事は情報係で、戦闘には参加せず周囲を警戒してもらっている。

「……CクラスとBクラスが怪しい」

「CクラスとBクラスが？・・・・・・・・・・・・・・・・姫路、島田！」

教室の端の方でガールズトークをしていた二人を呼ぶ。

「呼んだ？」

「どうかしたんですか??」

「遼平、二人を呼んでどうしたの??」

皆の視線が俺に集まる。雄二さえも『何してんだ、お前?』と目で語ってくる。まあ、まてまて。

「ここ最近で良い・・誰かが付き合ってたって話を聞いたことは無いか??」

俺がそう言うと二人は考えを巡らせ、暫く経つと島田が『あ!』と、声を上げた。

「噂なんだけど・・・・今、戦ってるBクラスの代表の根本が付き合ってるって・・・・聞いたような??」

「あ、そ、それなら私も仲の良い子に聞きました。」

二人の意見がピッタリと一致した。この事から考えると、俺の考えていた事は多分・・当たっているだろう。

「で、それが何か関係があるのか？」

「ありまくりだっつーの・・・・・・・・まさかとは思ったけど・・・・・・・・」

「もお！早く言いなさいよ！！」

短気な島田が手刀の用意をする。なんで『怒る』格闘技』になるの
か考えられない……。自分の身が大事なので俺は皆に俺自身が推
測したCクラスとBクラスの事について話し始めた。

第十話（後書き）

驚愕の真実とは!?

次回に乞うご期待!!

コレちよいちよい原作と変えてるって分かります???

第十一話

「簡潔に言っぞ」

俺に皆の視線が集まる。俺はスウッと息を吸い込んだ。

「Cクラスの代表と根本恭二は付き合っている」

『はい？』

Fクラス全員で耳に手をあてて聞き返してくる。吉本○喜劇かつ！！

「だから・・・Cクラスの代表の・・・えっと・・・小川？と根本は付き合ってるってんだよ」

雄二とFクラスの連中はお互いに罵り合っている。Fクラスの奴等
は分かるが、雄二の奴・・・

かなりテンパッてるみたいだな・・・。

「・・・・・・・・・・（トントン）」

「ん？どこ行ってたのムッツリーニ？」

明久の隣にムッツリーニが現れた。ムッツリーニが帰って来たって
事は・・・調べが済んだって

事だろう。さすが情報係、仕事が早いな。

「・・・・・・・・・・話は真実」

ムッツリーニが俺たちに撮ってきた写真を見せた。Cクラスの代表
の小川と根本が机を挟んで向

かい合つて座っている写真だ。たぶん、Cクラスで撮ったんだろう。
・・・早い。

「じゃ・・・・・・・・じゃあ・・・Cクラスが怪しいって・・・？」

「コレからすると、ワシ等の警戒をCクラスに向ける為じゃろう・・・」

「・・・・・・・・・・あとコレ」（スッ）

ムッツリーニが内ポケットから小型録音機を取り出した。・・・

ここはノーコメントにさせて

くれ。

「ん？それは俺が前もって根本のポケットに入れて置いたのじゃないか」

Fクラスの奴等との罵り合いを終えた雄二がムツツリーニの持っている録音機を見た。

「……………根本の計画の素性が録音されてる」

「……………マジで!?!?!?!」

オーマイガー！あんなに自信たっぷりの説明しようとしていた自分が恥ずかしい……。そんな

俺の心とは裏腹にムツツリーニが録音機の再生ボタンを押した。

『で、Fクラスの奴等が来なかったらどうするのよ?』

『いや、坂本だから必ず来る。そして何らかの条約を持ち出してくるだろう』

『フ〜〜ン……そこに根本君が来て、協定の事を持ち出すのね』

『卑怯だと思うかね?』

『さあ？勝った方が正義って所かしら・・・』

『クククク・・・早く来いよ・・・クズクラス共』

録音機が止まった。心の底から沸々と何かが噴き出ている様に感じる・・・皆を見ると、明久と

秀吉は眉をひそめ、姫路と島田は顔を真っ赤にして怒っている様だった。

「・・・ねえ雄二・・・協定って？」

明久が雄二に訊ねた。

「『試召戦争に関する一切の行為』だ」

「じゃあ、この事を先生達に言えばアタシ達の・・・勝ち？」

「ああ・・・勝てる、けどな・・・」

雄二が言葉を切って俺達（俺・明久・秀吉・ムツツリーニ）の方を向いた。皆が無言で頷き合う

・・・どうやら、バカな考えをしているのは俺だけじゃない様だな・・・。

「このまま勝つことは出来るけど・・・」

「俺達の間違ったつか・・・インスピレーションの問題だな・・・」

「うむ、インスピレーションは分からんがまったくじゃ・・・」

「・・・・・・外道には外道で返す」

「つかことだ・・・野郎共、根本に地獄を見せてやれ」

雄二がFクラスの野郎共にそう言った。

『異端審問会じゃああああああああああああああああ！！』

『！！！！！！』

『『『『『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお』』』』』

ダダダダダ　　バタバタバタバタ　　うおおおおおおお

！！

の行動は我等、異端審問会を敵に回す行為と知っての事か!！」

『ちよっ!ち、違う!!!しらなかったんだ』言い分は後ほど聞こう、
連れてけ!』や、やめろお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

『………Fクラス戦は中止ね』

Bクラス戦・勝者Fクラス

勝敗理由 Bクラス代表の棄権により決定。

第十一話（後書き）

はい、個人的に根本が嫌いなんで声だけの出演でした（笑）

いよいよAクラスとの戦いですね！！

果たして、原作どおりになってしまうのか！？

はたまた、遼平が奇跡を起こすのか！？

第十二話

Bクラス戦が終わった翌日。いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺達は、もうじきお別れに

なる予定（多分）のFクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れ

たのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

壇上の雄二がいつも一緒にいる俺や明久でも覚えのないほど、素直に礼を言った。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「総員退避！！コイツは俺らの知っている雄二じゃねえ！！」

「ブツ殺すぞ、遼平。だけどな・・・柄じゃねーことは分かっているが、これは偽らざる俺の気

持ちだ」

どうやら本当に俺達に言っているらしい。隣にいる明久はどうやら今の雄二の言葉に感動したら

しい・・・まあ・・・分からんでもないけどな・・・。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいって

もんじゃないという現実を、教師共に突きつけるんだ！」

『おおー！！』

『そうだー！！ー！！』

『勉強だけじゃねえんだー！！ーっ！！』

なんでだろう・・・雄二の言葉に皆の気持ちが一つになった。そんな・・・そんな気がした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

昨日の帰り道に聞いた話だった、クラスの奴等はかなり驚いていたようで、教室中にざわめきが

広がった。

『どづいつことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで勝てるのか？』

「落ち着いて聞いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子とF・・・もといバカクラス代表坂本雄二。まあ、クラス間の戦争を代

理で行うのだから、代表同士の一騎打ちも当然と言っちゃ、当然なんだが・・・。

「果たして、雄二なんかで勝てるのか・・・無理だぬああっ！？」

思わず本当のことを言った俺の頬をカッターがかすめる。どうやら投げたのは雄二らしい・・・

殺すきかつ！

「まあ、遼平の言つとおり確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれぬ」

分かってんなら俺にカッターを投げつける必要は無いんじゃないの？

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともによりあえば俺たちに勝ち

目はなかった」

雄二の話に皆が耳をかたむける。

「今回だって同じだ。俺たちは翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達に勝ち揺るがない」

絶望的だった試召戦争を勝利に導いてきた雄二だからこそ言える言葉だ。無理だと思っけていても

毎回打ち勝ってきただからだろう、この提案を否定する人間は誰もいない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおーーーーーっ!』

「その事について反対の奴は って、いないな・・・」

「皆、雄二のことを信じてるみたいだね」

「うむ、仲良き事は素晴らしいの」

どうやら雄二のかけ声で奴等の心に火が点いたらしい。お前等、出番無いんだぞ？

「.....あっ」

「どうした？明久？？」

急に明久が声を上げた。

「あのさ……雄二ってさっきから霧島さんの事『翔子』って言うてるの……なんで？」

「むう、言われてみれば……仲が良いのか？」

確かに。雄二はさっきからずっと霧島の事を『アイツ』とか『翔子』って呼んでたな。顔見知り

でなけりゃそんな呼び方はしない。

「ん？……ああ、その事がアイツとは幼馴染だ」

「「総員、狙ええっ！！」」

「なっ！？なぜ遼平と明久の号令で皆が上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵……いや、全人類の敵めがっ！！」

「Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

男子生徒の意見は言葉が無くても満場一致。クラスの団結ってすばらしいね。

「テメー等、後は頼むぞ」

Aクラスに来ていた。

「フウ……何が狙いなんだい？」

現在雄二と交渉のテーブルについているのは久保利光。コイツは俺の中の要注意人物ランキング

のトップ3に入っている男だ。ちよいちよい明久を見ている……
・殺すぞ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

久b・・変態が怪しむのも無理はない。最下位に位置する俺らが、
一騎打ちで学年トップの霧島

に挑むこと自体が不自然極まりないのだからな。当然何か裏があると
考えてるんだろう。

「試召戦争を手軽に終わらせるのは良いのだけどね、しかし僕達には
何のメリットも無い」

「そうだな……ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった
？」

雄二が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。交渉の始まりだ。

「時間は取られたが、たいした事はなかったよ？」

俺との丁重なお話によって、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。
結果は、Cクラスの設備は今

やDクラスと同じとだけ言っておこう。

「さて、Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラス……ああ、昨日来たアレか……」

ちなみに根本君には丁重にお話をした結果、Aクラスへの宣戦布告モドキをもらった。あり

がたいことに、女装までしてくれてAクラスへのインパクトはかなりのものらしい。

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。」

「しかし、BクラスはFクラスとの戦争で負けた。三ヶ月は戦争できない筈だが？」

試召戦争の決まりの一つで、負けた方のクラスは三ヶ月間戦争できない。これは試召戦争の泥沼

化を防ぐために決めた決まりだ。

「確かに俺たちは勝った。でもな……『和平交渉にて終結』てことになってるんだなあ〜コレ

が

「……………」

秀吉が交渉のテーブルと指差した。

「いいのよ、代表もいることだし……それより、遼平……」

「なんだ？優子??」

優子が顔を下に向ける。俺から見ると影になって表情は良く見えな
い。

「なんでアンタ……Fクラスなの……」

「うぐっ!?!?そ、それはだな……あ、あはははは……」

なぜだろう、優子の周りの空間が歪んで見えるのは……。

「アタシと一緒にクラスがそこまで嫌なのかしら？」

と、優子の声が聞こえたのと同時に俺の意識は暗転した。

「うっ……」

目を開けると見慣れた天井が広がっていた。身体を起こそうにもな
ぜか激痛が奔る。

「あつ！気が付いたんだね、遼平！！」

「良かったの」

俺が目を覚ましたのに気付いた二人が駆け寄ってきた。

「俺は……一体……」

「も〜ビックリしたよ、急に秀吉のお姉さんが島田さん・美波み
たいになっただから」

ああ……なるほど……俺は優子に目に見えない速さでお仕置き（
拷問）を受けたのか……。

ん？あれ……いま、明久……島田の事……

「なあ、明久……お前、いつから島田の事『美波』って呼ぶよう
になっただんだ？」

「……グスン……グスン……」

「泣く様な事にあっただのかっ！？」

俺の間に明久がしくしく泣き始めた。俺が気を失っている間になに
が……！？

「ほれ、明久……お主、遼平に言うことがあったのではないのか？」

秀吉が明久の頭をよしよしと撫でる。

「あつ！そうだった・・・Aクラス戦のことなんだけど」

「そついやーそれを聞きに行ったんだっけ・・・」

なんで聞きに行くのに、気絶しなきゃいけないんだろう・・・。

「代表同士じゃなくて、クラスから五人出てきて、一騎打ちを五回してその内三回勝ったら勝ち

ってルールになったんだって」

ということは・・・向こうは霧島、久保、優子は必ず出るな・・・。

「配役が勝敗の決め手になるやもしれんの・・・」

秀吉が顎に手を当てて考える。その戦いの勝敗で俺達の今までの戦いが泡と消えるか、それとも

実を結ぶかが決まる・・・。暫くの間、黙り込んでしまう・・・。

「・・・。。。だぁー！！！！！！！めんどくせー！！！！！！そんなのは雄二の役目だからいい

んだよ！」

俺が言い切ると二人は顔を見合わせてプツッと噴出し、笑い始めた。な、なにが面白いんだよ！

「ハハハハハ、そうだよね・・・雄二の役目だもんね」

「フッフ、遼平らしいの・・・」

「なんか、バカにされてるみたいで気にいらねーな・・・」

俺の呟きにまた噴出した二人は、カバンを持って教室を飛び出した。

誰もいない校舎を、俺たちは走りぬける。

決戦は・・・明日。

明&遼「お前のせいだろ!!!」

第十三話

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任又の名を『文月の氷の女王』高橋女史が立会人を務める。正直言つて、もの凄く苦手なタイプだ。

「ああ」

「・・・問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。Fクラスの腐った畳だとTPOに欠けるとの意見によってAクラスに決まった。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは・・・優子だ。なぜだろう・・・全身が異様に震えるのは。対するこちらは

「ウチの出番ね！」

島田が優子の相手らしい・・・うん。

「はい、終了オーーーーー!!!!!!」

「小此木、言いたい事があるから後でこっちに来てくれない？」

「では、教科は数学です。」

始めっ!」

「試獣召喚っ!」

高橋女史のかけ声と共に優子と島田が同時に叫ぶ。二人に似た召喚獣が、それぞれ武器を持って出現する。優子は西洋鎧にドでかい槍、島田は軍服にサーベルだ。

「ウチ、数学だけは自信があるのよ!」

「あら、ごめんなさい」

電子掲示板に点数が映し出される。

□	Fクラス	島田美波	数学	132点
	VS			
	Aクラス	木下優子	数学	357点
□				

私も得意分野なの」

圧倒的 point 差だ……。点数に驚いたのか島田の召喚獣の動きが鈍い。しばらくの打ち合いの後、優子の召喚獣に島田の召喚獣が敗れた。

「ごめん……。負けちゃった……」

「気にすることないって、勝負はこれからだよっ!!」

落ち込む島田を明久が励ましている。その様子を遠くから見つめて
いる姫路。修羅場だな……。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は英語でお願いします」

Aクラスからは斉藤が、我等がFクラスからは……

「よし。頼んだぞ、遼平」

「おう!……はい?」

幻聴だ、幻聴に決まってる。

「大丈夫だろ?」

自信たっぷりの雄二の言葉。

「でもな……k」それでは、始めて下さい」「って、おiiiiiiii!」

俺の言葉を聞かずに開始を告げた高橋女史。はー。やるしかないか……。

「試獣召喚っ！」

お決まりの召喚ワードを言えば俺の足元に幾何学模様が現れ、召喚獣が姿を現す。相手の斉藤の召喚獣は優子と同じ西洋鎧で二刀流だ。

「小此木君」

「なんだ？」

斉藤が話しかけてきた。

「私は絶対に負けません」

「そっか……。俺もだよ！」

電子掲示板に点数が表示される。

『 Aクラス 斉藤美穂 英語 358点

ザワツ

『無理だ、358点なんて勝てるわけがない』

『俺達には無理だったんだ……』

『姫路さん達に賭けるしかない』

Fクラスの連中が次々に諦めていく。おいおい、俺の点数まだだろーが……。

「まずいな……さすがの遼平でも……」

「大丈夫だよ、だって

」

Fクラス 小此木遼平

英語 862点

「英語は得意だもん」

シ

ン

Aクラスが静まりかえる。

「今回は低かったね」

「うむ、いつ見ても凄いの」

「これだけは凄いのよね」

明久、秀吉、優子がそれぞれ感想を述べている。

「あ……あの……え？」

最初に立ち直ったのは斉藤だった。さつきから『え？』たら『はい？』なんて言葉を連発している。何言ってるんだコイツ？

「ちよつ、おま……遼平、なんだその点数はっ!？」

雄二が後ろで騒いでいる。慌てぶりが清々しい……ハハハハハハハ！

「コレか？前に言っただろ？数学と物理と英語は得意だと」

「得意不得意以前の問題だぞ!？」

「うるせーな……それ！」

雄二の言葉を無視して俺のもう一つの武器ダーツの矢を斉藤に向けて飛ばす。

プスッ！
(ダーツの矢が斉藤の召喚獣に刺さる音)

ポキユツ！
(斉藤の召喚獣が消える音)

「
Fクラス 小此木君の勝利です」

俺の勝利を淡々と告げる高橋女史。もつと騒いでも良いんじゃないの？

「よくやったぞ、りょうりぎゃフスッあああああああああああああああああああ
あああああ！」

俺が勝つことを諦めていた雄二に目潰しを喰らわせてから明久と秀吉の方に近寄る。

「ふー疲れた~~~~」

「お疲れさま」

「うむ」

秀吉がタオルを渡してくれた。なんて気の利いた娘(?)を持つたんだろう(泣)
なんて考えてると三回戦が始まったみたいだ。Aクラスからは工藤？
っていう奴が出てきた。ボーイッシュな女だな。。。我等がFクラスからは寡黙な性欲者・ムツツリーニが出るらしいが、大丈夫か??

「おい・・・ムツツリーニ大丈夫か？」

「う~~~~ん・・・多分大丈夫だと思うよ？」

「なにやら話しておるようじゃぞ？」

三人で考え込んでいると工藤がこっちを振り返った。

「そつちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

何を言い出すんだコイツ。

「フツ。もちろん望むとこ」

「

スツ (明久の背後に姫路と島田が回りこむ音)

ボキギヤキボギヤツ (明久のいろんな関節が外される音)

バタツ (明久が倒れる音)

明久は静かに倒れた

白目で。

「明久あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！！」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから要らないわよっ！！」

「そうです！永遠に必要ありません！！」

「お前等には血も涙もないのか！？」

倒れた明久を抱き起こす俺の隣で、二人が更なる追い討ちをかけていた。俺達のやりとりに事の発端の工藤が苦笑いをしてこっちを見ている。

「なんか……ごめんね……」

「お前が手を出したわけじゃないから良い。くっ、とりあえず保健室に……」

「それでは始めて下さい」

「状況を見るよっ！！」

明久が倒れたにもかかわらず工藤VSムツツリーの戦いが始まった。とりあえず俺は明久をAクラスの端にあるソファーに寝かせて

召喚獣の戦いを見守ることにした。

「うぬ？遼平、ムッツリーニの戦いは見ぬのか？」

後ろから声がかかった。振り向くと、秀吉がヒエピタを持って立っていた。

「ああ、ムッツリーニは勝つと思うからな……保健体育だけは」

「うむ、否定はできんの……」

秀吉の持ってきたヒエピタを明久のおでこに貼る。関節なのにヒエピタ張っても意味無いじゃんとか言っなよ。

「はあ……」

「ぬ？遼平？」

「いや、ちよつとな……あゝ『ワアアアアアアアアアア！』ん？」

俺の言葉は大きな歓声によって遮られた。どうやらムッツリーニが勝ったようだ。これであと一勝すれば俺達Fクラスの勝利になる。

「どうやら勝ったようじゃの」

「ふ〜良かった〜」

「う、ん……あれ？……ほ、く……」

タイミング良く明久が目覚めた。どうやら関節を外された時の記憶がスッポリと抜け落ちているらしい。なんて都合の良い……………。

「明久起きたか!!」

「僕なんで…………戦争は!？」

「今、二勝目じゃ」

「次の対戦者出てきなさい」

高橋女史の呼びかけにFクラスからは姫路が出てきた。

「俺の予想だと…………ここには久保が出るはずだ」

「うわっ!雄二、いつの間に…………」

「ぬあ!? 遼平! あ、あれは!」

「どうしてWhy?」

秀吉が指差した方を見るとそこには黒髪をなびかせて凜とした表情のAクラス代表・霧島翔子が前に出ている。

第十三話（後書き）

長い・・・・・・・・長すぎるじー！

ホント・・・・・・・・早く、合宿編に行きたいのだ。。。

いつになるやら・・・・・・・・（遠い目）

第十四話（前書き）

ようやく出来た（涙）

身を削るようになして書きましたよ・・・。

ご感想など・・・お待ちしてま〜す。

圧倒的な点差だ。

「やっぱり、学年主席は違うな・・・」

「大丈夫かな・・・姫路さん・・・」

召喚と共に霧島の召喚獣が飛び出した。

「なっ！は、速い！！」

「姫路さんっ！！」

「は、はいつ！」

明久の声のおかげで霧島の攻撃は避けられたが、予想以上に厄介だ。

「おい、変態雄二。これはヤバイぞ」

「変態は余計だが、まさかここまでだとは・・・翔子の野郎・・・」

「姫路さん！頑張って！！」

霧島の召喚獣が攻撃のタイミングを計っている。霧島の攻撃パターンは相手の攻撃を受ける前に持ち前の素早さで切り裂くといった所だろう。それに対して、姫路の召喚獣の攻撃はあの大きな剣を使った広範囲攻撃だ。

「振りかぶったら最後だな・・・」

「ああ・・・」

「どうして？姫路さんの方が剣も大きくて強そうだけど？？」

「確かに姫路の方が有利に見えるけど、実際は小回りの利く霧島の刀の方が有利なんだよな」これが

「……確かに小型カメラの方がいい」

「ムツツリーニ、それは違うと思うんじゃないが」

俺達がこんなやり取りをしているなか、姫路と霧島のバトルは続いている、が。

「……甘い」

「えっ！きゃ、きゃあっ！！」

ダッ ザンツ！！

ほんの僅かの隙を突いて霧島の召喚獣が姫路の召喚獣の懐に飛び込んだ。もちろん、一瞬の出来事に反応できなかった姫路の召喚獣はそのまま切り捨てられ

『 Fクラス 姫路瑞希 総合科目 0点

VS

Aクラス 霧島翔子 総合科目 2815点

』

勝負は決まった。

「勝者Aクラス、霧島翔子！」

『ワァーーーーーーー!!』

『さすが代表!!』

『好きです!霧島さん!!』

「すみません……負けちゃいました……」

どよんとした空気の姫路が俺たちの方に帰ってきた。

「姫路さん……凄いよ!霧島さんとあそこまで戦うなんて!!」

「うむ、アレほどじゃとお主は良くやったのじゃ」

「……………(グッ)」

「まあ、しょうがないわよ」

「いい感じだったぞ姫路」

「皆さん……ありがとうございます!」

にしても……………。

「雄二、不本意だが……頼んだぞ」

「ハッ、お前からそんな言葉が出てくるなんて明日は槍でも降るのか？」

「うるせえ」

次の雄二が出る試合で全てが決まる。

「こっちは俺とムツツリー二が勝って二勝、あっちは優子と霧島が勝って同じく二勝・・・分かるよな？」

「当たり前だろ・・・俺が言い出した様なもんだからな俺で決める」

今だけあの天然危険物野生全開ホモ野郎の雄二がかっこよく見えた。決める時は決めるか・・・霧島が惚れるわけだわ。

「行って来る」

『坂本—————!!』

『頼んだぞ—————!!』

『俺らの希望の星よ—————!!』

Fクラスの野郎共に見送られて雄二はステージに上がった。

「で、なんの教科で勝負だい坂本君？」

Aクラスからは無論、久保利光が出てきた。

「そつだな・・・じゃあ、数学で頼むわ」

「僕は良いよ、何でもね・・・」

「ちよつと待て！雄二よくかんご」それでは始めてください」話を聞いてください、お願いしますマジで！！」

恒例と言って良いほどの俺の言葉を無視して開始を告げた高橋女史。
この人ホント・・・俺の事嫌いだろ（泣）

「「試獣召喚！！」」

お決まりのキーワードと共に二人の召喚獣が召喚された。久保の召喚獣はこれまた西洋鎧に姫路の剣に似た剣を二つ・・・二刀流だ。今思ったがこの学校の召喚獣は西洋鎧が多いな・・・。

「・・・・・・・・遼平」

「ん？どうした明久??」

後ろから声が掛かり振り替えると、全てを諦めて全てを愛しむ様な慈悲深い笑みをした明久がいた。

「うおっ!??ど、どうしたんだ!!」

よく見れば後ろのFクラスの野郎共+秀吉たちも聖母マリアの様な顔になっていた・・・死んだ魚の様な目で。

「・・・・・・・・（スッ）」

□ Aクラス 久保利光 数学 382点
VS
Fクラス 坂本雄二 数学 198点
□

ザシユツ！

点数が表示されたと同時に雄二の召喚獣が久保に切られた。

「勝者Aクラス！この戦争はAクラスの勝利です！！」

高橋女史の声がAクラスに響いた。

俺はゆっくりと雄二へと近づく。

「雄二・・・大丈夫だぞ・・・」

「なに！？罰はないのか！？」

雄二が助かったなんて言っている。

「なあ、明久？」

「うん、大丈夫だよ・・・雄二」

俺と明久は雄二の肩に手を置いた。

「
」
痛いのは一瞬だからな(ね)「
」

「はっ!?!ちよっ、まっ・・・ぎゃああああああああああああ
ああああああ!!!!」

Aクラス戦 勝者Aクラス

第十四話（後書き）

いよいよ次で試召戦争は最後です。

長かった……。

エピソード

さてと、前回の話だが・・俺達Fクラス対Aクラスの試召戦争は2対3で惜しくも敗れちゃった。代表の雄二にも罰を受けさせ今、俺たちはFクラスでホッと一息ついている。

「ったく・・・雄二のあの自信が何処から湧いてくるのか調べてみたいもんだよ・・・」

「まったくだな・・・いつそ、解剖するか?」

「遼平が言つと冗談には聞こえんのじゃが・・・」

「ハハハハ、何言つてんだよ秀吉・・・冗談じゃねえぞ?」

「雄二!! 逃げるのじゃ!!」

俺の言葉に秀吉が慌てて雄二の肩を揺さぶっている。何をそんなに慌ててるんだ? 何て考えてると雄二が目を覚ました。(雄二が眠っていた理由が知りたい人は前の話の最後を読むと分かりやすいぞ)

「うっ・・・ここは・・・天ご・・・Fクラスか・・・」

「お目覚めですか? 代表」

「・・・」

「雄二? どうしたの?」

俺の隣からひよっこりと顔を覗かせた明久が呆けてる雄二に声を掛けた。

「いや……あー俺は疲れてるのかもしれん……」

「Aクラス戦の後に寝たのにか？」

「アレは寝たとは言わないだろう!?!」

ガウと雄二が俺に吼える。何言ってるんだ、眠らせてやったのによ……感謝しやがれ。

「……いくつか疑問があるが、一つ聞いて良いか？」

雄二は額に手を当てた。

「この状況は……なんだ？」

雄二に言われて辺りを見回す。目に入るのは

1・ムツツリーニが写真のチェック中の様子

2・須川の屍

3・残りのFクラス生徒の屍

4・秀吉と明久

俺は顔を雄二の方に向ける。

「何かおかしいのか？」

「おかしすぎるだろ！！何で屍だらけなんだよ！？」

ご覧のとおり今のFクラスで動いている・・・もとい、意識の有るのは俺・明久・秀吉・ムツリーニそしてさつき目覚めた雄二だけだ。

「実はだな・・・このクラスの担任g「Es ist ernst
！！（大変よ！！）」は？」

俺が説明しようとした矢先に教室に島田が飛び込んできた。様子がおかしいぞ？

「どうした？雄二の顔面に驚いたのか？」

「Wenn ich nicht scherze！！」（ふざける場合じゃないのよ！！）」

うおっ！？よ、予想外のドイツ語・・・訳わかんねえ・・・。とりあえず雄二に視線を送るが、どうやら雄二にも分からないらしい。言葉の分からない俺達をよそにますますヒートアップする島田の会話。

「Es ist ernst! Mizuki ... Mizuki
i（大変なのよ！瑞希が・・・瑞希が・・・）」

「瑞希って・・・姫路がどうかしたのか？」

俺が聞くと島田の目からぼろぼろと涙が出てきた。なっ！？そんなに重大な事件が起こってるのか！？次の瞬間、俺達の想像を超える出来事が告げられた。

「瑞希が・・・瑞希が・・・転校するって!!！」

一難去つてまた一難はこつ言つ事をさすんだな。

エピソード（後書き）

やっと終わった『試召戦争』。

コレだけで十四話ってどんだけ……（汗）

いよいよ次回からは……待ちに待った『文化祭編』

遼平はどんな活躍をするのでしょうか？

私にも分かりません（笑）

番外編：『バカ部屋』

明「吉井明久と！」

遼「小此木遼平の！」

明&遼『放課後居残り補習室！略して《バカ部屋》！！！！！！』

ドンドン パフパフ〜 いいぞー！！ キャー！！！！

明「さあ、始まりました。放課後居残り補習室・通称バカ部屋！！」

遼「いや〜ほんつとコレがピンで話になるとは想像もつかなかったぜ（しきりに頷く）」

明「しかも見てよコレ！！今まで補習室だったのに今日はAクラスだよ！！」

遼「小説だからわかんねーけどな」

キュキュキュキュ バツ（スタッフがカンペを見せる音）

明「え、何々・・・『今回のバカ部屋では遼平の謎について色々暴露していきます』だって」

遼「え〜俺かよ」

明「しょうがないよ、この『俺とバカと召喚獣』は遼平が主人公な

んだし・・・」

遼「主人公って言うてもな・・・そんなに活躍してねーぞ俺・・・」

明「嘘だっ！！」

遼「なぜひぐらし！？」

明「活躍したじゃないか！！ほら、Aクラス戦のときの！！」

遼「アレは・・・アレだ・・・話し的にも勝たなきゃいけない！って思ってたな・・・」

明「僕を見てよ！何してたと思う？端っここで解説だよ！？ミスター味っ　だと味　について回ってる蝶ネクタイの人だよ！？」

遼「分かりにくっ！！ちよっ、明久？！おまつ、キャラ崩れてるぞ！？」

明「キャラとかどうとかもっ、どうでも良いんだよ！！」

遼「ちよっ！ス、スタッフフー！！スタッフ、オイ！！」

くしばらくお待ちください

遼「さて、明久の暴走が治まったところで・・・なんだっけ？？」

キュキュキュキュ　　バツ

遼「そうそう、俺の暴露だったよな……うっん」

明「いじいじ（教室の端っこ）」

遼「
最終回に俺は死ぬ」

明「もの凄いカミングアウト言い出したあ!!!!!!!!!!」

遼「いや、マジマジ……最終回に俺『ら、来年の……バカ・テス・みた……かった……』って言って死ぬ予定だし（本当ではありません）」

明「最後の方完全に第二期の宣伝だよな!？」

遼「はい、冗談はコレくらいにして……」

明「うっん……喋る事ないの？」

遼「あるっちゃ……有るんだが」

キュキュキュキュ ババツ（カンペ×2）

明「えつと……『これ以上は後からでるネタだったり、キャラ紹介のところで出したいので控えてください』だって……」

遼「つち・・・ったく、どうすんだよ・・・尺余っちまったじゃねーか」

明「あれ？このボタンって・・・なに？」

遼「ん？・・・『押して下さい』だってよ・・・押す？」

明「うゝん・・・このパターンは鉄人が出てきて追いかけられるってパターンだと思う」

遼「だよな〜作者の考えなんてあの変態雄二と同じレベルだからな・・・」

キュキュキュ バツ (カンペ)

明「『大丈夫ですよ〜鉄人先生は今回はオフの日という事で駄目でした』だって」

遼「鉄人のオフって完全にジムでも通ってるんだろ」

明「確か、三丁目のササガワジムに通ってるらしいよ」

遼「マジで!?!あそこ俺の通学路じゃん・・・」

明「出会いがしらに補習室へ・・・なんちゃって」

遼「いや・・・相手は鉄人だ、有るかもしれない」

明「・・・なんかがごめん」

キユキユキユ バツ (カンペ)

遼「『さっさとボタンを押して下さい』・・・ああ、そういえば・・・
どうする?」

明「え〜でも・・・ね〜」

パンツ!! (スタッフが思いつきりボタンを押す音)

遼「あっ! てめっ、ボタン押しやがったな!!」

プシューーーー (煙が出てくる音)

明「ゴホッ、なにコレ・・・ちよっゴホッ、前、ゴホッ」

遼「ゴホゴホゴホ・・・け、煙が晴れてきたぞ!!」

バツ (煙が晴れる音)

バン (女装姿の雄二登場)

明&遼「おほろばろおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお」

雄「なんで俺はこの小説だとこんな扱いなんだ?!」

「しばらくお待ちください」

遼「うっぷ・・・くそっ! 予想外の攻撃だったぜ・・・」

明「（死亡中）」

「俺の謎についてだったのに、いつの間にか話しが逸れてたぜ・
」

キュキュキュ バツ （カンペ）

遼「『後三秒で終わります』って、ふざけん^{フツッ}」

放課後居残り補習室

完。

番外編：『バカ部屋』（後書き）

何がしたいんだろうか・・・。

第十六話 清涼祭編 (前書き)

明けましておめでとうございませう！

今年も、遼平たちを生温かく見守ってください！

それではございませう

「姫路が転校って・・・どういう事だよ!!」

「瑞希が言ってたの・・・お父さんに『あんなクラスに居てもお前のレベルは上がらない』って言われたって・・・」

島田が顔を下げた。確かに、このクラスで姫路と対等に渡り合えるのは俺ぐらいだろう(数学・英語・物理だけ)そうになると、姫路父の言っている事も一理ある。

「それなら次の振り分けまで、待てば良いんじゃないの?」

明久が小首を傾げる。

「そもも言つてられないのよ。瑞希の転校のもう一つの理由が『Fクラスの環境』なんだから」

「えっ?環境?」

「そう、正しくは『設備の問題』ってこと」

そう言われて、俺たちは思わず納得してしまった。

ハッキリ言つて、姫路にFクラスの設備は厳しい。これは誰もが考える事だろう。競争意識を高めるといふ学園側の考えは否定しないけど、姫路は既に高いレベルのはずなのにこの処遇だ。これはおかしい。ござにみかん箱という設備の上、切磋琢磨しようにも周囲の人間はバカだらけ。(ござにみかん箱の原因は誰かとは言わないが、野生全開卑猥変態異常野郎とだけ言っておこう)まあ、本人に非がないのにこんな環境では、普通の両親なら誰もが転校させようと考えるはずだ。

「それに瑞希は、身体が弱いから・・・」

「そつだよね。それが一番マズいよね・・・」

島田の言葉に悔しそうに顔を歪ませる明久。確かに、身体の弱い姫路にココFクラスは健康に害を及ぼす可能性がもの凄くある。どんなに掃除をしようがたかが学生の掃除では衛生的とはいにくいし、今はまだいいが、冬場は隙間風が入ってくるだろう。姫路もだが他の生徒も体調を崩す可能性があるだろう。

「おい、雄二。これはマズいんじゃないのか？」

「奇遇だな・・・俺も同じ事を思った」

「だよ姫路さん！当たり前転校前だよ！？」

ボソリと呟いた雄二に向かって明久が叫ぶ。どうやら、姫路の転校話で頭がプチパニックになっているらしい。言っている事が意味不明だ。

「日本語を喋れてから叫べ。確かに姫路の転校は戦力を失うからな・・・だが、不味いの設備の問題だ」

「・・・設備？」

明久達が雄二の話に耳を傾ける。雄二は試召戦争以来の真剣な顔つきに変わった。

「今のFクラスの設備だと身体の丈夫過ぎる俺達は兎も角、他の奴等は大丈夫かは保障できん」

雄二の言つとおり、身体が丈夫な（鉄人に殴られても五分で立ち直れるぐらい）俺達なら兎も角、島田や秀吉、常に血が足りないムツツリーニ、ゲームばかりしているFクラスの野郎共。2〜3人欠席ぐらいいは良いが、もしもインフルだとか集団感染になった場合、居ても苦しい戦力が居なくなる事によつて他の奴の負担が増え又そいつが倒れるという悪循環を生み出すだろう。

「ムツツリーニの情報収集能力、秀吉の演技力、島田の数学の点数・
・もしもの時に無いと大変になる物ばかりだろ？」

「確かに・・・」

静まり返る俺達。すると

「・・・・・・・・（トントン）」

「ん？どうした？ムツツリーニ??？」

「・・・・・・・・良い方法」（スッ）

ムツツリーニが取り出したのはさっき鉄人が出て行く前に渡して行ったプリントだ。

「何々・・・『召喚大会』？なんだコレ？」

プリントには『召喚大会申し込み用紙』と書かれている。ちなみに召喚大会とは外部からの客に召喚システムを知ってもらおうと学園設立当初から恒例でやっている出し物だ。優勝すると何らかの景品が貰えるらしい。基本的には二人一組での参加だ。

冒頭に戻る。

つくづくFクラスのバカさは計り知れないと肌で感じるぜ……。でも、姫路を転校させない為にも明久の恋の為にも俺も出来る限りやってみよう。何て考えてると、隣に居た雄二が立ち上がったってFクラスから出て行つた。明久を連れて。

「あの野郎・明久をどこに連れて行きやがる・・・はっ！ま、まさか！？」

「よく分からんが、遼平の考えている事は無いと思うぞ」

「・・・尾行」

ムツッリーニに促され俺達は明久と雄二の後をつける事にした。

今思えば、つけなきやよかった。

第十七話（前書き）

いや〜受験で遅れてしまいましたWWW

あ、ちなみに私受かりました！！

これからもこいつ等をヨロシクお願いしますWWW

第十七話

前回のあらすじ、姫路の転校疑惑が浮上した。俺達Fクラスは転校阻止のために知恵を振り絞っている中、雄二が明久と共に教室から出て行った。怪しいな・・・よし、尾行開始！！

「失礼しまーす」

Fクラスから出て行った雄二と明久はとある部屋のに入って行った。

「あそこって・・・なんだっけ？」

「確か・・・学園長が居る部屋じゃったと思うが・・・」

「・・・あの部屋には仕掛けてない」

何を？と問い掛けたいのを我慢して俺達は扉に耳をくっつけた。ポゾボゾとだが、声が聞こえる。学園長と雄二と明久と・・・誰だ？秀吉に聞こうと扉から耳を離れた瞬間

ガチャ（扉が開く音）

どさどさ（俺、秀吉、ムツツリー二が部屋になだれ込む音）

部屋に沈黙が奔った。気まずい・・・気まず過ぎる・・・。ちなみに、下から俺・秀吉・ムツツリー二の順番なので上の二人が動かないと俺は動けない状態だ。

「・・・学園長、コレも貴方の差し金ですか？」

「さっきと同じようにアタシは知らないね」

「……………そうですか」

そう言い残すと田中（仮）先生は何事も無かったかの様に出て行った。一体何なんだ？

「さてと、取り合えず　　退いてくれムツツリーニ、秀吉」

「お、ああ、そそうじゃな」

「……………面目ない」

二人は俺が言ったと同時に退いてくれた。ホント良い子だなこいつ等……。俺は立ち上がり服についた埃を払っい秀吉とムツツリーニの手を掴み雄二たちに向き直った。

「俺達お邪魔虫みたいだから失礼しました」

足早に部屋を出ようとするが

「待つさね餓鬼共」

「うおっ!?!?」

目の前に妖k　学園長の顔をした妖怪が立っていた。つーか、いつの間に!?!?学園t・・・妖怪が瞬○を思いやがった・・・なんて声が雄二の方から聞こえたのは気のせいなのか……。

「ちょうど良いさね。人数は多い方が有利だしね」

「もしも〜し、何がですか〜」

「ところでそのバカ二人は何しに来たんだい？」

「無視かよっ!!!」

俺がツッコミを入れると、ハイハイ分かったさね・・・で？と聞き返してきた。一々腹立つなこの婆・・・。雄二の奴が一步前に出た。さすが坂本雄二。バカ呼ばわりされて顔色一つ変えないなんて・・・。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

前言撤回。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調の中に危険な言葉がちりばめられている。雄二の奴、相当キレてるな・・・。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

うん。お願いも何も無いセリフだな雄二。そんな慇懃無礼な雄二の説明を受けて、妖・学園長は思案顔になって黙り込んだ。

「あの、学園長………?」

明久が心配気に声を掛ける。もしか、雄二の態度に腹を立てたのだろうか?なんて思ってるんだろうな……。

「……ふむ、丁度いいタイミングさね……(ボソ)」

ん?今何か小声で呟いたような……。嫌な予感がするな……。

「よしよし。お前たちの言いたいことはよく分かった」

「え?それじゃ、直してもらえますね!!」

妖・学園長の言葉に目を輝かせる明久。良かった良かった、これで秀吉と明久の健康問題が一つ改善されたぞ。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨てて来い(こよう)」

「明久、もう少し態度には気を遣え。遼平、急に会話に出てくるな」

やべっ!!つい本音が!!

「まったく、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えてください、ババア」

「変態ホモ野郎（雄二）と同じくお聞かせ願えますか、顔面廃棄物クソババア」

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

学園長……もとい、ババアは呆れ顔で俺達を見る。なんだ？俺達変な事でも言ったのか？

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいがきども」

……キレていいか？

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

「と、いつもなら言ってるんだけどね」

明久の言葉を遮り、学園長……ババアが顎に手を当てて続きを話し始める。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやるんじゃないか」

交換条件か。ただでは引き受けないってか……。

「・・・・・・・・・・」

「おや？珍しく、雄二が何の反応もしない。口元に手を当てて何かを考えている。」

「その条件つて何ですか？」

「明久が黙り込む雄二に代わって話しを促した。」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「知らないと言っても言って欲しいのか？ああ？」

「礼儀を知らないのかいクソ餓鬼。ふう・・・じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「はあ？優勝賞品？？」

「賞品があることさえ知らないんだが・・・。大体、出場する気が無かったし、確か大会には島田が姫路と出るハズだしな・・・俺が潰すわけにもいかんだろう・・・。」

「学校から贈られる正賞には、『白金の腕輪』、副賞には『如月八イランド・プレオープンペレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」

「ペアチケット、と聞いて雄二がビクツと反応した。雄二の奴・・・ペアチケット欲しいのか？」

ハアっと大げさな溜め息をついて話を戻す学え・・・ババア。

「要するに『このチケットは賞品としてダメ！でも、もう賞品登録しちゃったどーしよう・・・よし、こいつ等に任せちゃえ』って事だな？」

「なんだか色々おかしいけど・・・まあ、そんな所さね」

ババアがエ〇アの碇ゲン〇ウの様に手を組んだ。なんだかさまになっ
っている気がする。

「とは言え、あんた達で大丈夫かどうか心配だね・・・」

「オイ、その賞品を取って来てやるから設備を何とかしろ」

「バカ言ってるじゃね」 「この条件を認めない場合こちらもそれ
なりの行動を起こすぞ？こっちは良いネタ持ってんだぜ？学園長セ
ンセイ？」 アタシの可愛い生徒だからね特別に認めてやっても
良いさね」

俺の声が聞こえたのか急にノリ気になったババア、賢明な判断だと
思うぜ学園長センセイ。交渉は終わったばかりに後ろを振り返ると
秀吉に明久が泣きついている。

「うおっ！？ど、どうした？！」

「遼平・・・お主・・・つく！・・・」

「何?! 『つく!』って何?! おい! 明久! 何で泣いてるんだ?」

ポン（雄二が俺の肩に手を置く音）

フルフル（後ろにいるムツツリーニが首を振る）

何でそんな聞き分けの無い子を諭す様なしぐさをするんだ……。
間違っていないぞ。俺は、間違ってるんかいんだあああああ
あああああああ！！

「小此木遼平……。要注意ですね……。」「

第十七話（後書き）

さて、最後のセリフは誰なんでしょうね？

今回の『清涼祭編』はおそらく長引くと思います・・・いえ、長引きます。

《アンケート》

あなたは根本恭二の事をどう思っていますか？

ぜひ、お答えください。

第十八話

カツカツカツカツカツ

誰も通らない静かな廊下に足音が響く。

「 遼平、お主は本当に良いのか? 」

「 …… (コクコク) 」

隣を歩いてる二人 秀吉とムツツリーニが真剣な顔で聞いてくる。その場の空気はバカテスには似合わないシリアスな雰囲気だ。

「 明久が決めた事だ・・・仕方が無い 」

俺は顔を静かに伏せた。零れそうになる雫を隠すように・・・そんな俺を見て秀吉は静かに語りかけてきた。

「 遼平、取り合えず 」

血の涙を拭いてくれんかの? 「 」

「・・・見た目が酷い」

「馬鹿野郎！！コレが泣かずにいられるかつ！！」

俺の目からは秀吉に指摘された様に、血の涙が頬に伝っていた。くそ、目の前が赤に染まってやがる！！俺はブレザーの袖で血の涙を拭く。

「まったく・・・店の宣伝をするはずが逆効果じゃぞ」

「・・・引いている」

そう。今、秀吉が言ったとおり、今日から二日間文月学園恒例の『清涼祭』が始まった。俺達Fクラスは中華喫茶『ヨーロピアン』を出す事になった。（なぜ、中華喫茶なのにヨーロピアン？と思ったならばFクラスだからただけ言っておこう）そして俺・秀吉・ムツリーニは店の宣伝の為に只今、学園内をぶらぶらと歩き回っている訳だが・・・。

「なんで俺が午前中の店番じゃないんだよ！！」

「クジの結果じゃろう」

「・・・運がわるい」

「うっ！！」

秀吉とムツリーニの言葉に反論できない。確かに、クジはFクラス全員が一斉に引いたし、元々『おい！クジで決めようぜ』なんて言い出したのは俺だし・・・でもでも明久と一緒に居たかった。

「・・・じゃなくて、あの子のこう何ていうか・・・その・・・」

「それとも・・・ワシじゃ嫌かのう?」

考え込む俺に秀吉が(可愛らしく)悲しそうな顔で聞く。馬鹿野郎
!!!(野郎じゃないけど)

「そんな訳ありません!!お母さん、秀ちゃんともまれて死にそんな位嬉しいんですよ!もし、秀ちゃんともダメだったらお母さんFクラスの奴等惨殺してたからね!!」

「お主はいつからワシの母上になったのじゃ!?!」

はっ!やばいやばい・・・本音が出てきちゃった・・・。兎に角、なつちまったものはしょうがないな・・・。

「っで、どこからまわる?」

「・・・Aクラスに行きたい」

珍しくムツツリーニが答えた。確か、Aクラスは『メイド喫茶』ご主人さま♪』だったっけ?・・・。

「よし、Aクラスのメイド服を見に行くとしようか・・・ムツツリーニの為に」

「・・・!!!(ブンブン)」

必死に首を振って否定するムツツリーニを無視して俺達はAクラスへと足を進めた。あれ?何か・・・忘れてるような・・・???

「『これが格の違いか！』って言った奴の気持ちが良く分かるぜ・
」

「うむ、コレほどとは思ってもみなかったぞ・」

「・・・場違い」

Aクラスの前で立ち尽くす俺達。圧巻だ。Fクラスの模擬店はボロボロの教室をクラス全員でくまなく掃除し、除菌&壊れた所を補強してテーブルに布を被せてテーブルのボロボロさを誤魔化しているのに対して、Aクラスの教室・もとい模擬店は見事なまでに飾り付けをされている。椅子はフカフカのソファァー、テーブルは白を基調としたアンティーク風、効果音の『キラキラ』がリアルに聞こえてくる・・・。

「と、取り合えず・・・入るか？」

「う、うむ・・・」

「・・・(コクコク)」

場違いな感じもするが、これも敵情視察だ。そんな言い訳を胸にAクラスの模擬店へと入る。そしてそこで目にしたものは

「うおお．．．．．」

「ぬあ．．．．．」

「．．．．．！！！！（カシャカシャカシャカシャカシャ）」

まさに樂園と言っても大げさではない美しいものだった。

「ん？この声は．．．もしかして．．．遼平？」

第十八話（後書き）

次回はいよいよ皆のアイドル

秀吉のお姉ちゃん〇〇がでてくるぜ

戦争以来の登場!!

ほんとにヒロインなのか心配です。。。。

第十九話（前書き）

本当に遅くなってすみません!!

マジ、ジャンピング土下座!!orz

ちよいちよい頑張るんでよろしく願いしまーす

第十九話

知っているだろうか？人間は本当に美しいものを見たりすると『わああああ！』とか『すごい！』などと声を上げられなくなる事を・・・。

「お帰りなさいませ、ご主人様！！此方へどうぞ！！」

「・・・・・・・・・・明久・・・お前に楽園を見せてやるっ！！」

「りよっ、遼平！？何処に行くのじゃ！！」

「・・・・・・・・！！（カシヤカシヤカシヤ）」

後ろから秀吉の声が聞こえたが、俺には明久をAクラス《楽園》に連れて行ってやりたいんだ！！俺はそんな思いを胸に廊下を疾風の如く走りぬけた。

その声が聞こえたのは丁度、Dクラスの辺りを通りかかった時だった。

『 仕事に お兄ちゃ ！』

「ん？この声・・・・・・・・どこかで・・・・・・・・？」

俺の耳にどこかで聞いたことのある声が聞こえてきた。一旦、足を

止めて周りを見渡すが・・・それらしき声の主は見当たらない・・・
気のせいかと、一步踏み出した時だった。

「あつ！！仕事人のお兄ちゃんです！！」

「・・・え？・・・俺？」

声と同時に腰の辺りにドンツ！と何かがぶつかって来た。

「仕事人のお兄ちゃん！葉月、言われたとおりにお祭りに来ました
！！」

ニツコリと満面の笑みで俺に顔を向ける女の子・・・だが、今の俺
にはその笑顔が辛い・・・。この子・・・誰だ？

「あー・・・その、だな・・・えーっと・・・」

「・・・もしかして仕事人のお兄ちゃん・・・葉月のこと覚えてな
いんですか？」

「いやいやいやいや、（多分）知ってるよ！？（多分）知ってるよ
！？」

葉月葉月・・・一体誰なんだ・・・。思い出そうと、頭をフル回転
させる俺の前をポ○太くんが歩いていった。きぐるみ・・・きぐる
み・・・あつ。

「もしかして・・・ぬいぐるみの葉月か？」

「あのぬいぐるみお姉ちゃん喜んでくれました！！」

この子 もとい、葉月との出会いは番外編を書くから（多分）それを読んでくれ。葉月が俺の手を掴む。

「仕事人のお兄ちゃん！早くバカなお兄ちゃんの所に行くです！！」

「そうだな。俺も丁度、明久に用事があるしな・・・行くか？」

「はいです！！」

俺の間に葉月は笑顔で返事をした。何処からか『ロリっ娘ハアハア

』なんて聞こえたが、頼むからFクラスの奴では無いことを願う。

「おーっす！帰ったぞー・・・何だこりゃ？」

俺の出てきた時よりテーブルが綺麗になっているのも気になるが、それよりも店内に客が1人も居なくなっていた。

「あつ、遼平！何処行つてたのさ！！」

椅子に座っていた明久が俺に気付いて駆け寄つて来た。

「スマンスマン・・・で、何だこの状況は・・・」

「ああ、何かねココの悪い噂をなご「バカなお兄ちゃん！！」ぐはっ！？」

「バカなお兄ちゃん、葉月言われたとおりに来ました！！褒めてです！」

「葉月！褒める前に明久が死ぬぞー」

「はわわわ！！バカなお兄ちゃん死んじややですー！！」

葉月が白目で伸びている明久を見て慌てている。まあ、どこかの誰々さんのお陰で丈夫な明久には心配は要らないだろ……。姫路と島田からドラオンール見たいな気が出ているのは彼女達自身の為に触れないで置こう。。。

「で、この状況は何だ？ブサイク　ゴリ男」

「それは俺の事を言ってるのか？この状況については俺が聞きたい位だ……」

雄二が珍しく苦虫を潰した様な顔になる。コイツがここまで顔をしかめるとなると、本当に客が入っていないのだろう。確かにFクラスの教室は汚いがしっかり掃除もしたしな……。となると……。

「妨害工作か……」

「！？？どういう事だ遼平……」

「俺と秀吉とムツツリーニが教室を出たときは客が居た。もちろん外にも列が出来ていてそれなりに繁盛していたにも関わらず、客の来店数がピークに達する昼飯時にここまで酷いとなるとそれしかねえだろ。もしくは、Fクラスに対する怨み……」

「……………ねえ雄二……………もしかして……………」

いつの間にか俺の隣に居た明久が意味深な視線を雄二に向けた。この様子だと、犯人に心当たりがあるみたいだな……………。

「ああ怨みだとすると……………さつき来た先輩だろうな……………」

「先輩？誰だ？」

「えつとね……………と……………常夏先輩？」

「バカかお前は……………ハゲとモヒカンだ」

「ちゃんとした名前は無いのか？」

まあ名前を知ってたら良いんだが、特徴と名前らしきあだ名も分かった事だし……………見つけ出して丁寧なお話しをすれば……………。と考えていた俺の携帯が鳴った。着信は……………秀吉だ。やべっ！！すっかり忘れてた！！俺は慌てて電話に出た。

「もしm『ああ、ようやく出ましたか』何で秀吉の携帯から掛けるのか3秒で説明しろさもなくば殺す」

秀吉の携帯からの筈なのに、明久に対しての要注目人物……………久保利光の声が聞こえた。俺の変わりように明久を除く全員が驚いている。

『はあ折角、木下さんの弟くんが落とした携帯を拾ったと君に知らせたのに……………心外だね』

「その事に対しては礼を言うが、その携帯から明久のメールアドレスを盗っ

たら・・・分かってるな？」

「え？僕が何？」

自分の名前が出たのに電話の内容が分からないので困惑している明久。お前は知らなくて良いんだよ・・・綺麗なままで居てくれ・・・。

『ハハハそんな事、僕がするわk「Do you want . . .
finger nail . . . to peel off? Or,
is it a skin of the face?」絶対に
ない』

そう言うと、久保との電話は切れた。英語の分からないFクラスの野郎共・葉月・島田はポカーンとしているが、分かってしまった姫路は顔を真っ青にしていた。え？何？俺そんなに酷い事なんて言っていないよ？気になる人は訳してみてくださいね

「お前は本当に明久と秀吉の事になると何で・・・」

「The position of the carotid artery . . . Do you remember?」

「さあ！妨害してる奴を見つけ出すぞ！！」

平然を装うとしている雄二だが、完全に目が泳いでる。このまま弄ってやりたい所だが、『姫路の転校危機』明久が悲しむ『俺の悲しみ』の方程式に則って即急に対処しなければならぬので、後で弄ろう。

「兎に角、雄二と島田・姫路は犯人を捜してくれ」

「うん　　って、アレ？ねえ遼平・・・僕は何をすればいいの？」

「明久は教室で客寄せをしてくれ（俺と一緒にいくと大変だからな・・・）大丈夫だ、秀吉とムツツリー二もこっちに向かっているらしいからな」

「うん。分かった！」

「葉月もバカなお兄ちゃんの手伝いをするです！！」

明久の隣で葉月が元気よく声を上げた。俺にはロリ属性は無いのだが・・・可愛いなオイ・・・。はっ！いかんいかん・・・。

「兎に角、明久と葉月以外は散ら　早く行け」

「遼平・・・てめえ・・・お前は後で覚えてるよ？」

「霧島呼ぶか？」

ヒュッ！！　（雄二が音速を超えた音）

「アキ！葉月に手を出したらクロスワヨ？」

「明久君・・・ワカッテマスヨネ？」

「お前達と喋れない様にもデキルゼ？」

ダッ！！　（姫路と島田が走っていく音）

俺のちょっとした眩きで皆は快く犯人を捜しに行ってくれたっ
つーか、姫路・・・お前、体が弱いんじゃないのか・・・？

第十九話（後書き）

〔番外編〕 後々気付いた 〓

「そついえば遼平。お前、明久の試合忘れてただろ？」

「は？何でだよ？」

「お前、見に来てなかっただろ？試合」

「バカ言ってるじゃねーよ。明久の試合は須川に頼んで（頼むといふ名の脅迫）録画してもらったぜ！！もちろん高画質でな！」

「……お前はそう言う奴だったな……」

「これで、明久の成長ビデオ1076本目だぜ！」

「久保よりお前が自重しろ」

主人公設定（前書き）

遼「今更だな・・・」

明「今更だね・・・」

雄「今更だ・・・」

秀「今更じゃの・・・」

ム「・・・今更」

主人公設定

名前 小此木おこのぎ 遼平りょうへい 16歳

身長 167cm 体重 56kg

趣味 明久と秀吉の成長記録を撮ること、散歩

特技 家事全般、テストのヤマを当てる事、投擲、

モットー 【明久・秀吉が第一】 【殺るときは殺る】

好きな物 パエリア、お金、人の為に何かできる奴、

嫌いな物 にゆるにゆるしたモノ、大切な人を傷つける奴、無駄遣い

容姿 整った顔立ちをしていて、明久や秀吉からは『余計な事をしなければモテるはず』と言われている。髪の毛は明久よりも濃い茶髪で、目の色は。。。

本編の主人公。明久と秀吉を溺愛している普通の高校男子。（その時点で普通じゃないby雄二）コレと言って説明する事もないが、運動能力は明久と雄二と行動しているせいか普通よりは優れている。他にも、裁縫・洗濯・片付け・掃除・料理と家事全般をこなすほど器用だ。

明久とはマンションが隣同士で、親同士が知り合い付き合うように

なる。秀吉とは小学校の5年生のときにとある事で知り合う。

基本は明久・秀吉以外には社交的な態度だが一度、明久か秀吉に対して悪意もしくは何らかの手を出した場合は攻撃的になる。

《成績》

数学・英語・物理の点数は高得点で調子の良い時は学年主任の高橋女史を超える。しかしそれら以外は割と低めで、国語・社会・保健体育は明久以下の点数だ。

《召喚獣&腕輪》

召喚獣の装備はバーテンダーの様な服にビリヤードのキューを装備している。通常の召喚獣とは攻撃方法が異なり、ビリヤードのキューで球を打ち出し攻撃するという方法だ。他にも、キュー本体で切り掛ったり、ダーツの矢で後方からの攻撃をする。

腕輪の能力は『物理』で、人間本体には攻撃は出来ないが学校の校舎などの器物には触れられる様になる。一種の観察処分者である。この能力で、キューで打ち出した球が壁を跳ね返り複雑な攻撃が可能になった。

《友人関係》

吉井明久

幼馴染兼親友。幼い頃からの付き合いの為に遼平は明久の、明久は遼平の考えている事が大体分かる。バカだけどバカじゃない。・・・？

木下秀吉

幼馴染2兼遼平の良き理解者。明久ほどではないが、考えている事はお互い分かる。遼平・明久・雄二(？)だけが秀吉は男だと分かっている。(他の奴等は男の娘)

坂本雄二

悪友。幾度と無く明久の幸せに対して立ちはだかる最大のゴミ。表面では嫌っている様に思えるが、心の中では(ほんの少し)信頼している。

土屋康太

悪友2。時々、第二の理解者。それなりに遼平はムツツリーニ対しては心を開いている。よく、ビデオの綺麗な撮り方を教えてもらっている。

木下優子

よく分からなくなってきた人(笑)。最初はヒロインのはずが、まだ、まともに出たことが無い。遼平とは秀吉関係で知り合い。

姫路瑞希&島田美波

これから可哀相になる予定の2人。個人的だが、作者はこいつ等が苦手。

《その他》

・秀吉の写真などは遼平によって禁止され、ムツツリ商店には置いていない。

・何気に鉄人とは仲がいい

主人公設定（後書き）

明「よく分からなかったね・・紹介」

遼「いや、俺が如何に明久と秀吉を愛S
大切にしているのか分
かっただろ」

雄「遼平は久保の同類なのか・・・」

秀「絶対に無いのじゃっ!!」

第二十話(前書き)

シリアスどーーーーん(笑)

第二十話

「さてと・・・明久と葉月の2人でこの喫茶店のチラシを配ってき
てくれ」

俺は教室に残った2人に中華喫茶『ヨーロッパ』と書かれている
紙を手渡した。そのチラシを嬉しそうに葉月が貰うと、勢いよく教
室の外へと出て行った。和むな・・・

「葉月ちゃん！待って！そんなに走ると転んじゃうよ！！」

「明久・・・気を付けろよ」

葉月の元に向かおうとする明久に小声で忠告する。今は店に対する
妨害だけが、もしかしたら明久たちにも手を出してくるかもしれ
ない。本当は着いて行きたい。明久だけならそこの奴ぐらい大丈
夫だが、葉月も一緒だととなると逃げる事も戦う事も出来ないだろ
う。本当に・・・本当に、着いて行きたいのに・・・そんな俺の考えに
気付いたのか明久はニツコリと笑うと

「本当に危ない時は遼平が来てくれるでしょ？」

「っ！！・・・ああ・・・そうだったな・・・よし、行ってこい
！！」

俺は勢いよく明久の背中を叩いた。バシンと痛そうな音がしたが気
にしない。目尻に涙を浮かべながら明久は先に行った葉月を追いか
けて行った。にしても・・・

「子供を持った親の気持ちがこの歳で分かっちゃまうなんてな・・・」

「全くじゃな・・・」

「・・・激しく同意」

「のわっ!?!ひ、秀吉!?!みゆ、じゃなかった・・・ムツツリーニ!?!」

ちょっと嬉しいような気持ちに浸っていると何処からか秀吉とムツツリーニが出てきた。うおお・・・マジでビビった・・・。

「戻って来んものじゃから迎えに来て見れば・・・。皆は何処にいるんじゃ?」

「雄二と姫路と島田は快く俺の願いを聞いてくれた。明久は島田の妹の葉月とチラシを配りに行ってもらった」

俺が言つと秀吉は顎に手を当てて何やら難しい顔をした。一体どうしたんだ?

「あつ・・・秀吉、お前携帯落としただろ? Aクラスの変態(久保)が拾ったって電話が掛かってきたぞ?」

「へんて・・・う、うむ、気付かんかったの・・・」

「丁度向かおうとしてたし・・・行くとすっく《こんにちは こんにちは》
にちワン ありがとう ありがとうウサギ 《ん?メールだど?》」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

俺の着信音になぜか冷たい視線を向ける秀吉とムツツリー二・・・
なぜだ？この着メロかなり気に入ってるんだが・・・？携帯の画面を
見ると差出人は 優子だ。

「優子からメールか・・・何々？」こつちに来たなら顔ぐらい見せ
なさいよ！！まったく・・・まあいいわ、秀吉の携帯は私が預かっ
てるから早く来なさいよ。』だそうだ・・・」

「姉上が持つておるのじゃな？！では、早く行かねば！！」

優子が自分の携帯を持っている事を知ると秀吉が慌てだした。なん
でだ？くゞ 変態が持つているんじゃないなら安心の筈、しかも
秀吉と優子は双子なんだからこれほど安心できる人は居ないはずじ
ゃ・・・・・・・・？

「（違うんじゃない姉上！遼平とは連絡を取りやすいようにする為に！
！）ぬあああああ！！」

「（・・・・・・・・身内にも見られたくないモノが！？）ツ！！」 《ブシ
ヤアアアアアア！！》

「お前等に何が起きてんだ！？」

突然、頭を抱えて叫びだした秀吉。何にも関係ない筈なのに急に噴
水の如く鼻血を噴出したムツツリー二。何なんだ！？取り合えず。
r z の格好で頂垂れている秀吉を起こし、さらに止まらないムツ

ツリー二の鼻血を必死に止めてAクラスへと向か

「ん？・・・・・・・・・・・・・・・・秀吉、先に行ってる」

「ぬ？！りよ、遼平！？何処に行くのじゃ！！」

「・・・・・・・・・・速い」

秀吉とムツツリー二から離れた俺は校舎裏に居る。理由は

「まさか気付かれてたとはね・・・・・・・・やはりキミは注意するべき人物の様だ」

「学園長室以来ですね

竹原教頭」

俺の後ろに居たのは文月学園教頭の竹原だった。コイツと会ったのは学園長室だけの筈なのになんで名前を知ってた？ストーカーか！！

「ストーカーではないよ。私はこの学園の教頭だ、名簿くらい幾らでも手に入る」

「読心術でも使ってるんですか？それともストーカーと自覚してるんですか？」

「さすがわFクラスの生徒だ・・・目上の人間に対する言葉遣いが成ってない」

「人の背後をコソコソ付き纏ってる人間に言われたくありませんね」

「ははは、手厳しい」

竹原はくすくすと笑っているが何の為に付き纏ってたんだ・・・？そこまで目立つような事はしていない筈だ・・・多分。もし、候補を挙げるとするならば

「優勝賞品」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

竹原が笑うのを止めた。顔から表情が消えていく。どうやら大当たりのようだ。しかしここで一つの疑問が浮かび上がった。優勝賞品は『白金の腕輪』と『如月ハイランド・プレオープンプレミアムチケット』だが、『白金の腕輪』を教頭の竹原が手に入れても使うことはできない筈。つーか、手に入れる意味が分らん。一方、『如月ハイランド』のチケットも同様に手に入れても意味は無いはず。元より、俺（達）に付き纏う意味が無い。

「優勝賞品と俺達は関係無い筈ですよね？」

「関係があるんだよ・・・奪われてしまったては取引が出来ないからね」

「取引・・・一体何を言ってるんですか？」

「おやおや・・・まさか学園長から何も聞いてないのか？」

竹原が不適に笑う。ババアから聞いていないだと？

「どうやら本当に知らない様だな・・・まあいい・・・知らないのなら君には用は無い」

竹原は振り返るとそのまま歩いて行く。知らないのなら君には用は無いだってさ・・・腹立つなあ・・・。兎に角、秀吉たちを追いかけ様と後ろを向いた時「ああ・・・一つ忠告だ」

「召喚大会で優勝しない・・・まあ出来無いと思うが、もし優勝するつもりなら止めた方がいい」

「どういう意味ですか・・・」

「君達の安全の為に言っているんだよ・・・楽しい思い出のままに居たいだろ？」

「・・・アイツ等に手を出したら殺すぞ」

「手を出すか、出さないかは君たち次第だよ・・・」

。それではと言って立ち去って行く竹原。一体何がどうなってんだ・・・

「楽しい学園祭の筈が・・・何だこのミステリアスな雰囲気・・・」

兎に角今は秀吉たちの後を追う事が先だな・・・

俺はAクラスへと足を向けた。

第二十話（後書き）

竹原のキャラが立ちすぎてる)。。(；(

誰だよ!？

予想外のシリアスになってしまったorz

つ、次はが、がんばるゾ (汗

第二十一話

「・・・何か俺、今日はやけに校内回ってるな・・・」

完全にラスボスキャラ化している教頭・竹原との会話という名の脅迫を受けた俺は先に行った秀吉たちを追いかけてAクラスへと足を進めている。清涼祭だと言うのに俺は何でこんな・・・サスペンス風な事に巻き込まれてんだよ!?

「竹原の野郎・・・あのババア、俺達に何か隠してんのか・・・？教頭が直々に俺達（俺）に接触までしてきたんだ・・・裏がデカイな・・・」

考え事をしていた俺の視界にふと、接客をしている生徒の姿が入った。青春だねえ・・・!!?

「ぬああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!
!忘れてたああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

「うおっ!?!な、と、突然叫ぶな!!!!つて・・・お前は小此木!?!」

声が聞こえて振り返るとそこには・・・・・・毒キノコが立っていた。

「毒キノコじゃねえよ!!根本だ!ね・も・と!!!!お前等と戦ったときに変な仮面の奴等にボッコボコにされた根本だつて何言ってるんだ俺ええええええええええ!!!!」

これまた丁寧にあの後のことを説明してくれた根本。ああ、接客し

「あ、どうも……ナンデコンナコト……」

只今、俺こと小此木遼平はBクラス代表『毒キノコ』こと根本恭二とお茶してます。ことの始まりは、上の文を読んでもらえば良いんだが……。根本とお茶ねえ……。

「お茶は旨いが……。前の面がなあ……」

「お前がうるさいから教室に入れたが、なんだ？西村先生でも呼ぶか？」

「マジ根本君イケメン」

「黙れ」

軽蔑の視線を向ける根本。つーか、根本ってこんな性格なのか？キヤラちがくね？そんな事を考えながらお茶を飲む。Bクラスの出し物は、和風喫茶『風流亭』だ。Aクラスよりは広くはないが、綺麗な教室に和のモノをこれでもか！と盛り込んだBクラスはAクラスとはまた違った魅力があるな……。

「で、何を騒いでたんだ……」

「明久と秀吉の成長記録を撮り忘れてた」

「ブフォッ！！ゴホッゴホ ……岸原、西村……いや、鉄人を呼んでくれ」

『わかてて』待て、岸原君！何でこんなにノリがいいんだ！？」

教室の受話器を持ち上げようとする岸原を止める。

「お前の吉井と木下への溺愛は話に聞いていたが……ココまでだったとはな……」

「溺愛については否定はしねえよ……俺にとって明久と秀吉は息子と娘みたいなもんだからな」

「娘じゃないだろ……。小此木、気を付けた方がいいぞ……」

「どう言う事だ……根本」

ズズツとお茶を飲んだ根本は先程の軽口とは打って変わって真剣な口調で話し始めた。

「ついさっきの事だ、俺がビラを配りにちょっと出たときにだな

「

「これで、クラスの奴等も教室に入れてくれるだろう……」

校舎裏を通過してBクラスに帰ろうとしてた時に聞いたんだよ。

『はい。分かってますよ……はい……』

「（この声は……竹原教頭？）」

『はい……あの賞品を手に入れば学園自体を潰せます』

「(学園を潰す!?)」

『大丈夫です……はい、ちょっと邪魔な奴等が居ますがこちらで片付けます。はい……それでは……《ピッ》……ふう……さて、《ピピピ》もしもし、私だ……ああ、Fクラスだ……名前は　　吉井明久だ手筈通りに頼むぞ……』

「って、な事になってたn《ガタンツ!!》お、おい!小此木!」

俺は根本が話し終える前にBクラスを飛び出した。どういう事だ?何で明久を!?廊下を周りを一切気にせず走りぬける。途中で誰かにぶつかるが気にしてる場合じゃない。階段を一気に降りてFクラスへと飛び込んだ。

「明久は無事かッ!?!」

『『『『『……は?』』』』』

「突然どうしたのじゃ遼平?明久なら三回戦に雄二と行ったぞ?」

「……唐突すぎる」

Fクラスには秀吉とムツツリー二と姫路・島田・葉月+ 達がいっつの間にか増えている客へ接客していた。

「なんじゃ？何やら変な事に巻き込まれておるみたいじゃな・・・」

「ちよつとな・・・客が増えたがどうしたんだ？」

「いや・・・何やらAクラスで騒いで来たようなんじゃが・・・」

急に秀吉が遠くを見始めた。気のせいなのか、ムツツリー二の顔も何かを悟ったように微笑んでいる。何があったんだ・・・Aクラス・・・。

「遼平こそ何処に行っておったのじゃ？姉上が探しておったぞ？」

「俺は・・・毒キノコと・・・いや、秀吉は知らなくていいんだよ？」

「ぬう！急に子ども扱いしないで欲しいのじゃ！..」

むくーと膨れっ面になる秀吉の頭をナデナデする。可愛いなー可愛いよー家の子。。。に、しても一体何なんだ・・・賞品がそこまで欲しいのか？文月学園を潰すなんて・・・ちよつとどころではないヤバイ話だな・・・。

「どつなつてんだよ・・・ちきしょー・・・」

第二十二話（前書き）

ご無沙汰してます！結城です

投稿が遅れたので全力で

言い訳させていただきます

いや〜ねえ〜パソ子がねえ？

ストライキしちゃったのよ〜（笑）

これからちゃんと（不定期になるけど）投稿したいね（・・・）
キリッ

今回は初の明久視点でいきたいと思います!!

第二十二話

「たっだいまー」

「おーっす、戻ったぞー」

「おう、お疲れ明久。お茶でも飲めよ」

大会から戻ってきた僕達を出迎えたのは遼平だ。今は喫茶店の接客中なのかエプロンに蝶ネクタイというちょっとシニールな格好だ。

「ほい、明久頑張ってるな」

「もちろんだよ！姫路さんが転校なんて嫌だからね・・・」

僕は遼平から渡されたお茶を飲む。冷たくて丁度いいや・・・教室を見回すと、秀吉や姫路さん達も接客で大忙しだ。何故だが、葉月ちゃんまでチャイナ服を着ている。多分・・・いや、絶対にムッツリーニ絡みだろっな・・・。

「明久、悪いんだがホールの方に出てくれないか？」

「ん？いいけど・・・須川君たちは？」

この時間帯は須川君率いるFFF団のDグループがホール担当の筈なんだけど・・・？もしかして、また妨害！？

「いや・・・須川たちは・・・鉄人に・・・」

「 ああ、そう言う事が・・・いいよ」

遼平の「鉄人」という単語からしてバカだと言われている（心外だけど）僕でも何があったか予想は付いた。あらかた、Aクラスか何処かの教室にカメラ片手に乗り込んだんだろう・・・。

「おい、遼平。客の数はどうだ？」

さつきまで静かだった雄二が話し始めた。

「客足も殆ど戻ってきてるぞゴ」 ゴリラ

「言い直したなら直せよ！！ 妨害のほうは・・・」

「全く来ないな・・・不気味なほどに」

「嵐の前の何とかがつてやつだね」

遼平の話だと僕たちが大会に出ている間は何にも起こらなかったらしい。姫路さんたちに何も無かったのは嬉しいけど、なんだか不気味だ。そんな僕に気付いたのか遼平が頭をくしゃくしゃと掻き回して「大丈夫だ」と小声で言ってきた。

「やっぱり・・・あの2人・・・デキてるんじゃない・・・」

「そ、そんなの・・・ふ、不健全です！！」

「お主らは一体何を言っとるんじゃない？」

「・・・一部に売れる」 《カシヤカシヤ》

うん。後ろから聞こえてくる声は聞こえなかった事にしておこう。その声の人たちの為にも・・・僕のためにも・・・でも、ムツツリ

「一二の写真は燃やさせてもらうよ。」

「バカなお兄ちゃん!!」

「あつ、葉月ちゃん!? 何で、チャイナ服なんて着てるの?」

トコトコとお盆を持った葉月ちゃんが僕の方にやって来た。服が、私服からピンクのチャイナ服に変わっている。

「葉月も手伝いたいって仕事人のお兄ちゃんに言ったら、この服をくれたです!!」

「ムツツリ商店お手製の特別チャイナ服だそうだ」

「ムツツリ商店の力を改めて思い知ったよ・・・」

盗撮・ブロマイド・抱き枕・女装写真・極め付けにチャイナ服って・ムツツリ商店がどこに向かって走ってるのか分からない・・・。

「バカなお兄ちゃん、葉月頑張るです!!」

「そっか、じゃあ頑張ろうね葉月ちゃん」

「はいです!」

チャイナ服の裾を翻して葉月ちゃんはお盆に乗ったウーロン茶を持って行った。本当に健気な子だな・・・葉月ちゃん。

「君。注文をしてもいいかな?」

「あ、はい。どうぞ」

そうやって葉月ちゃんの後ろを見ていると、近くの席のお客さんから声がかかった。雄二も遼平も厨房に行ったので取り合えず、失礼のないようにさつき遼平から渡された注文票を構える。

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

メモを取り、注文内容の確認の為にお客さんに顔を向ける。……あれ？この人、英語の洪田先生じゃないか。先生がお客さんとして来るのは珍しいなあ……。

「ありがとうございます。後ほどお持ちしますので、少々お待ちください」

「ああ、ありがとう。それと一ついいかい？」

「はい。なんででしょうか」

決まり文句を告げて厨房に向かおうとする足を止め振り向く。

「Fクラスの吉井明久という生徒は誰かな？」

「え？吉井明久は僕ですけど……」

脈絡もなくいきなり訊ねられて少し驚いてしまう。洪田先生は3年の英語担当の筈だけど、僕に何の用だろう？

「ああ、そうか。君が・・・いや、観察処分者が一体どういう人物なのか知りたくてね。引き止めてすまないね吉田くん」

「先生、吉井です」

「おっと、すまない。え・・・そうだ、そうだ、田中くんだ」

「先生、もはや一文字もかすってませんよ」

自分から言っただけで名前を間違えてるんだ。しかも、笑顔で。

「明久、ムツツリー二が倉庫から茶葉を持ってきて欲しいとの伝言じゃ」

そんなやりとりをしていると、ホール担当の秀吉が僕のところに来た。秀吉のチャイナ服はミニ丈で生足が眩しいよ・・・これもムツツリ商店製だとしたらGJMツツリ商店。

「ん、わかったよ。先生、ちょっと行ってきてもいいですか？」

「ああ、構わんよ。誰か見たかっただけだからね」

「？そうだったんですか？」

そんなに観察処分者が気になったんだらうか？3年の担当の洪田先生とは廊下ですれ違うくらいだし・・・。

「明久、ムツツリー二が急いで欲しいと言っておったぞ？」

「はい」

よく分からないけど、とりあえず用事を済ませるのが先だ。ストックの置いてある空き教室へと向かおう。旧校舎の廊下を早足で歩いて目的の場所へ。えっと、いくつぐらい持っていけばいいのかな？きちんと数を聞いておけばよかったな。

「おい」

「うん？」

空き教室の中で考えていると後ろから声がかかった。声の主は同年代くらいの男3人組。困ったことに勝手に空き教室に入ってきている。

「ああ、ここは部外者立ち入り禁止だから出て行ってもらえます？」

うちの学校では見たことない顔だから、きっと他校の生徒だろう。道に迷ったのかな？

「そうはいかねえ。吉井明久に用があるんでな」

そう言って、一番後ろの一人が後ろ手で扉を閉めた。

「へ？僕に何か？」

「お前に恨みはねえけど、ちょっとおとなしくしてくれや！」

言つやいなや、拳を固めて殴りかかってきた。ええっ！？なんで？

「ちょっと待った！人違いじゃないの！？」

「明久、無事か？」

夜
s
y

遠平が立っていた。

笑顔で。

第二十二話（後書き）

はい、暴走遼平登場ですね（笑）

次回がどうなるのか自分にも分かりません（ドヤ）

第二十三話（前書き）

久し振りすぎて、よく分からなくなった。

本当に久し振りです！！

学校が忙しくて忙しくて・・・。

必死に書いた久し振りの『俺とバカと召喚獣』

どうぞ！

第二十三話

初めてアイツに会った時、俺は思った。

『コイツはどうしようも無いほど馬鹿だ』

『そして、どうしようも無いほどに

優しいんだ』

だから、アイツが他に優しい分、俺がアイツの裏側になろう。

アイツが悲しまない様に、心無い言葉に傷つかない様に、利用されない様に。

俺が……………。

そう、心に決めたのは五歳の桜が舞い散る春だった。

「……………遅い」

「明久め、何をしておるんじゃ……………」

厨房で調理している俺の耳にムツツリーニと秀吉の声が聞こえた。

ヒョイと顔を出してみると、秀吉が眉間にしわを寄せていた。どうしたんだ？

「どうした？トラブルか？」

「おお、遼平。いや、倉庫に茶葉を取りに行った明久が遅いのじゃ」

「明久が・・・っ!!」

「ぬあ!??ど、どこに行くんじゃ!遼平!!」

秀吉の言葉を理解した瞬間、俺は調理していた料理を投げ出して走り出した。後ろから秀吉の驚いた声が掛かるが、気にしてられない。驚く客を押しつけ、転がるように廊下に出る。目指すは、倉庫。

『キャッ!』

『うおっ!?!』

『あ、危ねえだろ!!』

悲鳴や罵声が掛けられる。はっ、邪魔だ。倉庫の扉が見えた。すると、ふと、声が聞こえてきた。

『しめた!やつちまえ!!』

ブツンと俺の中の何か音が立てて切れた。それが明久に対して掛けられた言葉かどうかなんてするか。スピードを維持したまま、扉へと突っ込む。

「何だ？お前ら・・・」

「無視してんじゃねえぞコラア。テメーもコイツの仲間か？」

「仲間なら悪いが、俺達にボコられる」

と、言うと同時に三人の内の一審デブが殴りかかって来た。明久が何か叫んだが、問題ない。ヒョイツとデブの拳を避け、後ろ側に周りを腕を捻った。

「いでででで！！は、はな」

「黙れデブ、折るぞ」

凄みを利かせて言うと顔を青くしながら黙った。

「明久ー、こつち来い」

「え、あ、うん」

「行かせるかよ！！」

細い奴が明久の行く手にたちふかがる。邪魔だ。本当に邪魔だ。

「明久を通らせろ」

「ふざけんぞ」

「おい、聴いたか？アイツはお前の腕を折ってくれて言ってるぜ

「?ご要望に応えないとなあ?何処がいい?右か?左か?」

「や、やめろ!!と、通せ!通してやれ!!」

俺の呟きが聞こえたのか、青い顔をさらに青くしながら叫ぶデブ。すると、細い奴・ガリが明久に道を譲った。どうやらデブがリーダー格の様だな……。

「遼平……」

「明久、本当に本当に怪我は無いか?」

「うん。遼平が来なかったらボコボコだったけどね」

苦笑しながら言う明久。ほう……ボコボコねえ。

「明久、茶葉は持ってるか?」

「え?コレだけど?」

手に持っている茶葉を俺の前に差し出す。しっかり茶葉は持っているお前は偉いよ明久。

「じゃあ、先に教室帰ってる」

「でも、遼平!!」

「何だ?明久は俺が信用できないのか?かなしいーなあー」

「うう……分かった。けど、早く帰ってきてね!!」

「了解」

そう言い残すと、明久は倉庫を出て行った。これで、明久への心配が無くなったな。一息つく俺にデブがニヤリと笑った。

「ハツ、余裕こいて一人で何ができたよ!!」

「腕捻じられてるデブが何言ってるんだよ」

そう言い、デブの腕を放しながら空きの腹に蹴りを叩き込む。息をつめ、吹き飛ぶデブ。肉弾○車みたいだな！。

「さあ、お楽しみ時間だ」

頬が上がるのを自覚する。片づけが終わったら鉄人でも呼ぶか。

e a s a n t I t
s h o w . t h e
r b e g i n n i n g
o f
p l

バカと雪と死線の聖夜〜プロローグ〜

クリスマス。

その日はもつとも美しく甘美な日でもあり、そして同時に酷く残酷な日でもある。

そして今日、その運命に立ち向かう勇者共が戦場へと来た。

「コロス」

「うおっ!?!」

言い切った瞬間、雄二が襲い掛かってきた。

怒涛のラッシュを放ってくる雄二に対して、雪で足を纏わせながらも必死に避ける。

流石は中学時代は『悪鬼羅刹』なんて呼ばれてただけはある。通常ならば反撃するが、足場が足場なもんで攻撃がしにくい。

「うらあ!?!」

「なんの!つて、ぬあ!?!」

雄二の左ストレートを避けた瞬間、雪に足をとられバランスを崩した。

ここぞとばかりに攻撃を仕掛けてくる雄二。

殴られるのは構わんが、それが雄二ならば断固拒否だ。

慌てて起き上がるうとした俺に声がした。

「伏せて!遼平!?!」

「っ!?!」

誰かは分からないが言われるままに身体を雪に沈めた。

同時にドスドスと鈍い音とゴフツと何やら聞いてはいけない音・音が聞こえた。

暫らく伏せた後、顔を上げると……。

「・・・・・・・・・・」

「危なかったね、遼平」

「あ、明久・・・・？」

雪だまを持った幼馴染の吉井明久と雪に赤色（イチゴシロップだと思いたい）を滲ませながら倒れている雄二がいた。
パニックだ。

誰が？

俺が。

笑顔で立つ明久の頬には返り血（イチゴシロップ）が付いている。

「明久・・・雄二は・・・どうした？」

「雪玉を投げつけたら倒れちゃった」

雪玉つてその、カチカチに凍った玉の事ですか？明久さん。

しかも、倒れた雄二の近くには小石が転がっているのを見ると、どうやら雪玉の中に石を入れているらしい。
殺る気だ。

明久は完全に殺る気だ。

俺の背中に戦慄が奔ったと同時に、ザクザクと数人こちらに走って来た。

「あ、明久・・・速いのじゃ・・・!!」

「・・・・・・・・忍者並みの速さ」

「アンタに言われたら終わりよ、土屋」

「明久君、凄いですね!!」

セカンド幼馴染・秀吉とムツツリーニ・島田・姫路が息を切らしながら走って来た。

俺とした事がカメラを忘れてしまった事を思い出した。

流石に倒れたままは話しにくいので、立ち上がる。

「おー、皆来てくれたのか!!」

「当たり前なのじゃ! 遼平と明久だけでは心配での・・・」

「・・・被写体いっぱい」

「ウチも暇だしね」

うぬと唸りながら俺を見る秀吉。

カメラを構えながら親指を立てるムツツリーニ。

暇などと言いながら明久目当てであるう島田。

姫路は・・・オドオドと青い顔で焦っている。

明らかに挙動不審だ。

「どうした? 姫路」

「いや、あの、そ、そこに倒れてるのって・・・坂本・・・君・・・ですよ?」

「あ」

イチゴシロップを流しながら倒れた雄二をすっかり忘れていた。先程から降っている雪が少し積もっている。

てか、生きてるのか？コレ……。

「『あ』じゃないわよ！！坂本大丈夫なの！？」

「八割大丈夫だと思いたい」

「思いたいんですか！？しかも、八割なんですか！？」

「うう……」

「……まだ生きてる！」

「よし、任せて……！とどめは僕が……！」

「何を任せて良いんじゃない？」

そんなやり取りをしながら、雄二をFクラスへと運ぶ俺らだった。

雪合戦出来るのか……コレ……。

第一話（前書き）

話しがまとまらない。

文化祭終わってないのに良いのかな・・・。

良いのかな・・・。

イイヨネー

『第一回！聖夜なのに〜以下省略〜ルール』

・遼平と雄二をリーダーとした2つのチームの対抗戦。
・メンバーはグループのリーダー（遼平と雄二）が交互に選んでいく。

・全員頭に紙風船を付け、それが破損した場合失格となり補習室へ

GO

・ハンデとして女子は一度壊れても、もう一度だけ復活可能。
・両チームのどちらかのリーダーの紙風船が壊れた時点で終了。

「と、こんな感じかな・・・異議のある奴はいるかー？」

「小石やガチガチに玉を固めたり、入れたりはするな」

「・・・だそうだ、明久」

「善処するよ」

手を挙げた雄二の意見を一言で切り捨てる明久。本当に今日の明久はおかしいぞ・・・。てか、『善処』の意味を分かって使ってるのか？

「んじゃ、チーム決めるぞ」

「ああ、おい全員横に並んでくれ」

さあ、小此木遼平プロデューサーの大作戦の始まりですわよ！

やべ、口調が！？

横目で遼平たちを見ると、全員が集まり作戦を立てている。どうやら遼平にも何か策があるようだが、この戦い絶対に負けられねえ……。主に明久への復讐の為に。俺のチームには秀吉・姫路・島田・その他だ。この状況は見る様によつては劣勢に見えるが、完璧だ。絶対に勝てる……。いや、勝つ！！

「全員集まってくれ、作戦を伝えておく」

目指すは圧勝。

完全なる勝利。

「なんか、バトル小説っぽいね」

「迷走してるしな」

「完結するのかなう・・・」

「・・・無理っぽい」

第一話（後書き）

いよいよ次からは戦闘シーン!!
スカスカな頭をフル回転させて立てた作戦を使っぜ!!

ハッキリ言っつて残念すぎる（笑）

第二話

『ぐあああああああ！！！！！！！』

『吉村アアアアアアアアアア！！！！！！』

『坂本！！吉村が殺られたぞ！！』

「分かった、引き続き状況確認を頼む」

俺は雪の城壁に隠れながら指示を出していた。戦争が始まって10分が経った。開始時点の両チームの人数は25人ずつだったのが、今では15対11と差が出始めていた。俺のチームは15人と人数では勝っているがあっちにはまだ明久・ムツツリーニ・須川が残っている。厄介だな……。ムツツリーニの機動力は雪の上だと言うのに見事なだ。須川も本編では活躍できない苛立ちをぶつけているのか、兎に角凄い。ふと、遼平と明久の姿が見えない事に気が付いた。慌てて辺りを気にしながらも顔を出して辺りを見回す。

『ぎゃあああああああああああああ！！！！！！』

「あっちか！！」

叫び声の方を向くと。

「さあ、問答無用でいくぜ！昇竜拳！！」

を見れなくなったらアイツの 遼平の思う壺だろう。あの行動は俺への挑発だろう。ゆっくりと今の状況を整理する。

・俺達と遼平達の本陣の距離はおよそ25〜30メートル位だろう
・生き残っているのは男子（俺除く）12・女子2人・秀吉1人
・姫路・島田共に残りのライフは2ずつ残っている

（特攻 無理だな……。距離がありすぎる、相手の本陣に着く前に死ぬな……。もしも特攻出来たとして、あっちのリーダーは遼平だ）

しかも傍には明久が付いている。あのバカ、遼平の事になると鉄人並みの攻撃力だからな……。下手したら今度こそ死人が出そうだ……。なら、今度はコッチが仕掛ける番だ。

「姫路！島田！雪玉の生産よろしく頼むぞ」

「はい、頑張ります！」

「任せといて！隙があったら投げても良いんでしょ？」

「ああ、戦果を期待してる。秀吉！！」

雪玉をせっせと作っている姫路と島田に労いをし、前線に出ている秀吉を呼ぶ。

「どうしたのじゃ？雄二。ワシに何か用かの？」

「ああ、秀吉にしか出来ない策がある」

「どっするのじゃ？」

「秀吉の特技と秘策を使う」

俺は少しずつ降って来るこの戦争の元を指した。空の雲行きが怪しくなっただけだ。僅かに風が強さを増している。良いタイミングだ。

「雪・・・じゃと？」

「おい、その3人。伝令を前線部隊に伝えてくれ」

前線から下がって来た3人に伝言を伝える。これで準備は整った。あとは俺らしくも無い神頼みでやつだな・・・。

「全員攻撃に徹しろ！！」

俺は秀吉と共に前線へと出た。

「第一段階終了だな・・・危ない危ない」

「・・・見事だった」

雄二達の怒涛の攻撃から見事生還した俺と明久をムツツリー二が出迎えた。戦況は雄二たちが勝っているが、姫路たちを考えると五分五分だろう。走って乱れた呼吸を整え、指示を出す。雄二のことだ、

そろそろ仕掛けてくるだろう。

「でも、良いのかな・・・こんな事して・・・反則じゃないけど・・・」

「確かに罪悪感はあるが・・・雄二に勝つ為には・・・だな・・・」

「・・・準備は出来てる。あと、向こうも動いた」

顔に影を落とす明久。確かに、相手が知らない情報を公開せずに使
うのはアレだな・・・。改めて言われると、なんだかなあ・・・。
考え込んでいるとムツツリーニが報告しに来た。どうやら雄二も本
格的に攻撃を仕掛けてくる様だ。遠目でも分かるが、秀吉を連れて
いる。秀吉を中心とした攻撃のようだな。

「明久、様子はどうだ？」

「ボチボチかな・・・うん、もう少し」

「よし、そのまま　っ！？走れ！明久、ムツツリーニ！！」

俺はその姿を捉えたと同時に声を掛け、走り出す。俺の指示に瞬時に
反応した2人も動いた。ボゴツと先程まで隠れていた城壁が崩れ
た。

「な、何で！？硬く作つたのに！！」

「・・・！！」

「あ、あれは・・・！！」

俺は　　いや、そこにいた全員が戦慄した。城壁を破ったのは雪玉でも、自然に崩れた訳でも無かった。それはもっとも豪快でいて強力だが、諸刃の剣。

「・・・特攻だ・・・と・・・!?」

突っ込んできたのは出席番号17番の佐藤じゃないか!? バカな! 紙風船が割れたら補習室だぞ!? 鉄人の補習フルコースだぞ!? それほどもでに突っ込んでこないと危ない状況じゃないだろ!? 俺の頭の中はプチパニックだ。兎に角、近くの城壁へと身を隠す。

「どう言う事なんだ・・・。補習室だぞ? 分かってんのかアイツ・・・」
俺は既に戦死し鉄人に引きづられながら補習室へと行く佐藤を見る。何がアイツをそこまで駆り立てた・・・。明久も同様に見ている。拙いな、全員に動揺が奔ってる。指示を出そうとした俺の所に須川が慌てて駆け込んできた。

「小此木!!! 大変だ、坂本が!!!」

「雄二がどうした! 仕掛けてきたか!?!」

違つと須川は否定して、興奮した様に叫んだ。

「戦果をもつとも挙げた奴に木下の秘蔵写真を贈呈すると言ってるが本当か!？」

罪悪感が吹き飛んだ。

「須川、一つ頼んで良いか？」

「どうした？作戦の伝令か？」

「いや

」

「人が1人入る位の穴を掘っておいてくれ」

第二話（後書き）

雄二は春を越せそうにありません。

第三話

「良いか？兎に角、相手側にも聞こえる様に伝令しろ」

『『『任せとけ！！！！うおおおおおおお』』』

前線への伝令を聞いた3人は陸上選手並みの速さで前線へと向かって行った。雪の上で足場が悪い中よく走れるな・・・あいつ等・・・そんなに欲しいのか・・・秀吉の写真集。まあ、これで良いだろう。用を済ませ、振り返った俺の目に心配そうな顔をした秀吉が映った。

「どうかしたのか、秀吉？・・・ああ、写真集なら安心しろ。殆どが学校で撮影されたちゃんとした写真だからな」

「いや、その・・・じゃな・・・」

珍しく歯切れの悪い秀吉に首を傾げる。そこで、一つの考えが浮かんだ。ああ、コイツは遼平の事を心配してるんだな。もちろん、怪我では無く。正確に言うならば俺の（・・・）心配だ。今までの経験上、秀吉・明久に手を出した場合は遼平の手によって処理されて来ている。今回の秀吉写真集もアイツの耳に入ったらとあらば俺は入院を余儀なくされるだろう。

「心配するな、秀吉。入院は慣れてるからな」

「心配する要素しか無いんじゃないが・・・」

「すまないが、頼む！俺の生死が掛かってるんだ！！」

顔を赤くしながら俺の所に異議を唱えに来た姫路と島田。俺は誠意の気持ちを含めて土下座をする。もはやプライドなど死を前にするとシャーペンの芯も同然。突然の俺の土下座に困惑する2人だが構ってられない。起き上がると、前線へと秀吉を引き連れ走った。早々にこの戦いを終らせ、誤解を解かなければ。

「前線部隊！予定より早いがこれより作戦を開始する！！」

「須川ー！もう少しそこ削ってくれ！！そおそおそお」

俺は1人穴を掘る須川に上から指示を出していた。元々雪はそこまです積もっていなかったので校庭の端の方の雪山に穴を掘っている。

「・・・・・・敵陣が動き出した」

「了解、須川ーもう良いぞー！！」

「本当か！？はあー・・・・」

俺からの指示に動かしていたスコップを止めて息を吐く須川。コイツにはムツリ商会から姫路の写真をプレゼントしよう。一度背伸びをして頭の中を切り替える。ムツリーニの報告では雄二が本格的に動き出したのだから。

「須川、全員に例の配置に付く様に伝令してくれ」

「なんだ「姫路写真集」任せろ!!!」

瞬間移動のような速さで消える須川。ホントにいい性格してるな・・・
アイツ・・・。

「ムツツリーニ、明久は？」

「・・・例の位置にさつき着いた」

「手筈は」

「・・・問題ない(グッ)」

「そうか」

ムツツリーニの言葉に口元が緩む。ああ、楽しいな。この作戦は一つでも勘付かれたらお終いだ。まるでトランプタワーの様に。

「ムツツリーニ、俺は行く。手筈通りに頼むぞ」

「・・・任せろ」

ムツツリーニの声を背に、俺は戦場へと進んで行った。

全員が配置に着いた。俺が手を挙げたと同時に作戦が始まる。遼平のチームは雪の城壁に隠れ姿が見えない。籠城か？もしくは何かしらの策を考えているのだとしたら残念だがゲームオーバーだ。俺は自分の口元が上がるのを感じながら開始の合図をあげようとした。

『お、おい！誰かが歩いてくるぞ！？』

『狙えば良いのか・・・？』

『だが、「合図があるまで待機」って言われてるぞ？』

ザワザワと声上がる。話の内容から、どうやら向こうから無謀にも歩いてくる奴が居るらしい。作戦なのか、はたまた唯のバカなのか・・・。考えている俺の服を秀吉が強く引っ張った。

「何だ、秀吉？落ち着け、向こうの作戦かもしれん」

「・・・りよ・・・じゃ」

「あ？どうした？」

「遼平・・・遼平じゃ・・・」

秀吉が呆然と敵陣の方を見ながら呟く。急いで顔を上げた俺の目に映ったのは、敵陣　俺達の前に護衛1人付けずに立っている遼平だった。

「なっ・・・バカか！？」

「聞こえてんだよ、クソ雄二」

敵陣にリーダーである自分1人で乗り込み、あまつさえ、敵に囲まれているのにも関わらず、堂々と仁王立ちしている遼平。寒さで頭が凍結したのか・・・？ 呆然とする俺は、攻撃を指示もせず、ただ遼平^{バカ}を見ていた。そんな俺にニヤリと笑みを作る。

「『チーム・小此木』リーダー小此木遼平は、『チーム・ゴリラゴリラ』リーダー坂本雄二に一騎討ちを申し出る」

「誰がゴリラゴリラだ！！！！」

「そっちではないのじゃ！！！！」

第三話（後書き）

Q：長すぎやしないかい？

A：長すぎです。

予想以上に長くなっている雪合戦篇。
年越す前に終る（はず）・・・

いよいよ決着ですよー

第四話（前書き）

今回から書き方を変えました。

ハッキリ言いつと、どっちでやるか迷ってます。

第四話

「何が目的だ・・・」

俺は極力、顔を出さない様に遼平に問い掛ける。一騎討ちなんて持ち出しやがって、これは確実に裏がある。そんな俺にヤレヤレといった様子で手を挙げる遼平。

「どうせ、『裏があるに決まってる!』とか思ってたんだろ?」

「・・・無いのか」

「ある」

「総員攻撃準備」

遼平の一言に全員が攻撃態勢に入る。敵陣に1人で突っ立ってるのに何を言ってるんだ、この馬鹿は・・・。

「それにだな!お前にしても良い条件が付いてくるぜ?」

「良い条件だと・・・?」

「“今後、お前が明久に対して攻撃しても俺は一切干渉しない”
「なっ!?!」

遼平の言った一言に俺も、味方の全員も息を呑んだ。あの超絶過保護の遼平が自ら明久を条件に出した。息を呑んだ俺達の様子に勘違いしたのか、遼平が溜め息をつく。

「何だ?まだ、足りないのか?なら“秀吉の写真を売買する許可”も付けてやるよ」

「遼平!?!ワシもなのか!?!」

「何が目的だ……」

「おいおい、頭の中までゴリラかよ？俺の目的は一騎討ちだけ」

とぼけた様に言う遼平だが、この条件を出す限り本気だろう。おもしれえ……。アイツがそこまで本気になる理由は知らねえが、ここで応えなきゃ色々面白くねえし、周りがヤバイ……。特に

『何！？木下の写真が解禁だと！？』

『坂本！受ける、受けるんだ！！』

『俺達の希望が掛かってるんだぞ！！』

『うおおおおおおおおおお』

後ろの秘密結社みたいな奴等に闇討ちされるだろう。俺は隠れていた城壁から身を出し、1人立っている遼平の元へ歩きよった。指示を出し、味方を後ろに下からせる。校庭のど真ん中に俺達は立っていた。

「随分、自信があるようだな……」

「ゴリラの始末なんぞ俺だけで十分だ」

「ゴリラ言つな過保護野郎」

お互いを罵り合い黙る。冷たい風が間を吹きぬけた。刹那、俺は俺達は地面を蹴った。遼平の雪玉が俺目掛け投げられる。うまく屈んで避け、雪を掴み固め投げる。ほんの二十秒位の交戦。

「どうやら、お前も本気らしいな……」

「当たり前だろ？あれだけ条件だしたんだ」

ジリジリと横に歩く。ここは先程まで戦場だった場所だ、雪が殆ど無く、固まりきっている。目指すは六メートル先の無開拓地帯。

「それにしても、お前がここまで正々堂々としてるなんてな」

「それじゃあ、正々堂々してやるよ」

遼平がそう言った瞬間、俺は反射的に飛来する何かを避けた。紙風船が割れない様に雪の上に転がる。パウダースノーが舞い上がる。

「正々堂々」

叩きのめす!!」

パウダースノーが消えた場所には 遼平の召喚獣が手袋・マフラーと防寒装備で立っていた。立っていた。立って。たつて。

「おまつ！反則だろ！！召喚獣を使うなんぞ聞いてないぞ！！！」

「ハハハハハ、『召喚獣は禁止』なんぞ誰も言ってるナイ」

「クソっ！！テメーは良心がねえのか！！」

その瞬間、遼平の背後に恐ろしいオーラが現れた。アレだ、いつも翔子がキレた時と同じ様な……。俺は地雷を踏んだのか……？

「良心なあ……。そんなモン弾け飛んだわっ！！まさか貴様がまだ秀吉の写真集を持っていたとはなあ……。雄二……」

「そ、ソレとコレとは別だろ！！それにせめて俺のチームにも事前に召喚獣の事を言え！！！」

「何言ってるんだよ？召喚獣ならお前の目の前で召喚したぜ？」

「は!?!？」

遼平がニヤニヤと言う。バカな、そんな大切な事を俺が見逃す筈がない……。愕然としている俺に遼平が説明し始めた。

「俺がプロレス技をお前のチームの奴に決めていたのを憶えてるか・
・?」

「ついさっきの事を忘れるか」

「よーく、思い出してごらん・・」

そう促され思い出す。あの時は

「さあ、問答無用でいくぜ！昇竜拳！！」

「バックドロップ！！遼平、こっちに飛ばさないでよ！危ないんだからさ、もう少し離れた所に」

「さあ、問答」「さ、もんどう」「さもんどう」「さもん
”どつ”

「な？」

「な？じゃねーよ！！分かるか！ボケ！！」

どや顔で俺を見る遼平の顔に目掛けて雪玉を投げる。が、召喚獣に叩き落され通じない。そつちがその気なら一騎討ちなんてやってやれるか！幸い、遼平の味方は遙か後ろだ。このまま奴を狙えば！！

「お前ら！一騎討ちは中止だ！攻撃開始！！」

俺の指示に全員が攻撃を開始しようとしたとき、遼平が笑顔で手を挙げた。

そして、一言。

「

“マダンテ”

」

吹き飛んだ。

第四話（後書き）

次で終わります！！

よしちく・・・漸く・・・終るよ・・・。

第五話（前書き）

これで、終わります。

もはやカオス（笑）

第五話

『マダンテ』

ドラ○エの呪文。詠唱者の全魔力を放出して大爆発を巻き起こすという究極の呪文。禁断の呪文とも呼ばれる。詠唱者の全MPを消費して、その3倍（作品によっては2倍、1.5倍など減少傾向にある）のダメージを全体に与える。

白い雪が舞い上がる中、俺のチームが空高く飛ぶ。訂正『吹き飛んでいる』。ああ、夢だ……。夢に決まってる……。雪合戦とはもつと安全な遊びの筈だ。

「さてと……。色々聞きたいが、アレは何だ」

「対FFF団用特別製空気地雷 別名・姫路特製ビスケットだ」

ついにここまでの出来になったのか……。姫路クッキング……。と言つより、あれはもはや料理の域を超えているだろ……。そんな事を考えている俺に遼平が一步步近づいてくる。

「さあ、雄二・ゴリラ・坂本。降参しろ、大丈夫だ今なら二ヶ月の入院生活で済むぞ」

「どこが大丈夫なんだ!!」

「ちなみに霧島も付いてくる」

「お前は鬼かつ!？」

翔子が付いてくるとなったら負け。死。俺の背後は崖だ。しかし、遼平も気づいていない様だな……。俺が何の策もせずにノコノコと

「えへ ごめんね？雄二」

「あき・・・ひ・・・さ・・・テム・・・」

バスケットボール位の雪 氷の塊を持った明久を・・・どうやら背後から殴られたらしい。満面の笑みの明久が憎い。俺は沈み行く意識の中呟いた。

「もう・・・雪・・・関係ねえ・・・だろ・・・」

俺の視界はブラックアウトした。

「楽しかったねー」

「そうだなー」

「・・・いい思い出」

「うむ。そうじゃのお」

雪合戦大会が終わり、俺達は家路に着いていた。雪玉を作りすぎて指先が霜焼けになっている気がする・・・ワイワイと今日の事について話しながら歩いているとあっ！と明久が声を上げた。

「ねえ！見て見て！！ほら！」

明久に促され上を見上げると、そこには。

「こりゃあ……すげえ」

「……壮大」

「綺麗じゃ……」

光り輝く満天の星空が広がっていた。冬は空気が澄むって聞いてるが、ここまでハッキリと星が見えたことは無い。俺達はそのまま暫らく空を見上げていた。

「本当に冬だな……」

「そうだね……今日はお鍋にしようかな……。ねえ、僕の家で晩御飯食べていかない？」

「……ご馳走になる」

「ワシもお邪魔じゃないのなら、ご馳走になろうかのお」

「うん！僕1人だとお鍋なんて出来ないから」

ニッコリと笑う明久。秀吉とムツツリーニも鍋が楽しみなのか、緩んでいる。俺は明久の背中をポンと叩き、ムツツリーニの手を引いた。

「んじゃ、鍋の材料でも買いに行くか！いくぞ、ムツツリーニ！」

「……了解」

「ちよつと待つてよ！」

「うぬ！置いて行くのではないぞ！！」

俺達は雪が舞い散る中、近くのスーパーへと走り出した。

「はっ！ここは・・・何だ！？動けん　ちよっ、何だコレ！？何
で首以外埋まつてるんだ！？クソツ！遼平！誰か・・・誰かいないの
か！？おい、まさかこの状態で一晩過ごせと！？死ぬぞ！？本気で
死ぬぞ！？おい！鉄人でも誰でも良い！！誰か・・・誰か・・・助
けるオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

翌日、出勤した鉄人　　こと西村教員の手によって2年Fクラス
代表坂本雄二は救出された。本人に話を聞くと『サンタクロースが
俺に六文を渡したときは本当にヤバかった』と、訳の分からない事
を呟いていた。

「あつ、雄二掘り返すの忘れてた」

「明久、白菜が足りないのじゃが・・・？」

「・・・肉が無い」

「はいはい、待ってねー」

「まっ、いつか」

第五話（後書き）

はい、長ったらしい閑話でしたね（笑）

来年も俺とバカと召喚獣をどうぞ、よろしくお願いします。

それでは、よいお年を。

第二十四話（前書き）

明けましておめでとごいいます。

今年もこの小説をよろしく願います!!

では、清涼祭二部の始まりです。

第二十四話

初めてキミに会った時、僕は思った。

『キミはどっしりも無いほど不器用で』

『でも、どっしりも無いほど』

寂しがりやだって』

だから、キミが不器用な分、僕がキミを補おう。

キミが言った不器用な思いを、不器用なありがとうを、相手に伝える為に。

僕が……………。

そう、心に決めたのは五歳の桜が舞い散る春だった。

「ただいま!!」

「おお! 明久、無事じゃったのか!!」

「……………心配した」

Fクラスの扉を開けた僕を迎えたのは秀吉とムツツリー二だった。来客もひと段落したのか休憩時間の様だ。何故か皆に睨まれたのはそれほど忙しかったのだろうか。二人にごめんと言うと、秀吉が僕の後ろを見る。どうしたんだらう？

「明久、遼平が倉庫に向かった筈なんじゃが・・・」

「あ！そうだった！倉庫で変な人に絡まれちゃって、遼平が相手してるんだった！！」

慌てて飛び出そうとした僕の腕を雄二が掴んだ。いつの間に出てきたんだ雄二。

「ちよつ、放してよ！今、僕急いでるんだから！！」

「遼平ならさつき連絡があった。鉄人と一緒に居るとさ」

え？と、声を上げた僕の目の前にズイツと携帯を突き出した雄二。画面を見ると、ボロボロのさつきの人達の上に足を乗せて自撮りしている遼平が映っていた。下の方には、『駆除完了 マジ楽勝（・・・）bドヤア』と書いてある。どうやら心配は本当に無いみたい・・・。ほっと息を吐く。

「後から詳しい事は遼平に聞くとして・・・明久、四回戦行くぞ」

「え？もうそんな時間なの？」

時計を見て確認する。午後二時前だ。あれ？四回戦って二時過ぎの筈じゃ・・・？

「予定より対戦が順調に過ぎて、時間が余ってるらしい」

「へへ、そうだったんだ」

「あれ？アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？ 私たちも次が出番なんですよ」

チャイナドレスを纏った美波と姫路さんがトレイを置く。改めて見ると、本当によく似合ってるな。2人とも。おっと、いけない・・にやける所だった。パシと頬を叩き、気合を入れなおす。よし！

「バカなお兄ちゃん、何処か行くですか？」

「うん。ちよつと行って来るから、葉月ちゃんはここで待っててね」
「う~~~~」

葉月ちゃんの目線まで腰を落として言う僕に、不満げに頬を膨らませる葉月ちゃん。僕も妹が欲しかったな~~~~。

「大丈夫だよ？ テレビで観れるから、葉月ちゃんが応援してくれたら僕、嬉しいな」

「！？ 葉月、一生懸命応援するです！！」

召喚大会は一種の公開行事みたいなモノだから、やっぱり皆気になる。でも、店番とかその場から動けないと言う人の為に文月学園内のテレビなら大会の様子が観れる様になっているんだ。流石に葉月ちゃんみたいな小さい子を人だかりの中に1人で居させる訳にはいかないからね。ピョンピョンと飛び跳ねる葉月ちゃんの頭を撫でてから、僕達は会場へと向かった。

「葉月に手え出したらコロスワヨ」

「明久君、法律違反デスヨ」

「安心しろ島田、姫路。明久は必ず

手を出す」

「変な事言わないでよ！！雄二！」

「誰に命令された」

「……………」

「…………だんまりか、まあ良い判断だろう。オイ、鉄。アレ持つて来い」

「いい加減にせんか」

「うげっ！！」

鉄人の拳が俺の頭にヒットする。痛い。

「誰が鉄だ、誰が。お前は何をしてるんだ」

「取調べごっこ」

「補習室に来るか？」

「滅相もございません西村教員」

ぎろりと鋭い眼光を向けてくる鉄人に、冷や汗が流れる。こんな年に一度の楽しい日にあんなジメジメ（遼平のイメージです）した所で勉強しなきゃいけないんだ。さて、おふぎはここまでにしてと俺は縄で縛り上げられている三人組を見る。3人とも気絶させている。暴れられたらアレだしな。

「小此木、さっきの話は本当なのか……」

「本当本当、おおマジ。こいつ等、教頭の手先だ」

俺の言葉に困惑する鉄人。当たり前だろう、急に教え子が同じ学校のしかも教員に　まあ正しくは、教員の手先に襲われたなんざ信じられる訳が無い。それでも俺は言葉を続ける。

「鉄人。この学園祭、裏があるぜ」

「裏・・・だと？」

「ああ、それもこの学校を左右するかもしれない程の大きさの・・・な」

指導室が静まり返る。楽しい楽しい学園祭に本当に何してんだ・・・俺。

「まあ、俺はここで退散するよ」

「ああ、この件は学園長に報告しておく。・・・気を付けるよ」「うーっす」

鉄人の忠告を背に指導室を出る。わあっ！と歓声が聞こえる。どうやら四回戦が始まったらしい・・・。確か・・・姫路たちと明久の試合だったよな？まだ、余裕はあるし見に行くか。暫らく歩き、足を止める。

「て、事なんで 用件は何ですか」

「 バレてたかい？」

声を掛け、振り向くとそこには 竹原教頭が立っていた。

「どこかの中年親父みたいに加齢臭がプンプンするんでね」

「やはりキミは目上の人に対する言葉遣いを直した方がいい」

「ストーカーが趣味の変人に言われたくないですよ、先生」

俺の皮肉に貼り付けの笑みのまま返してくる竹原。一体何の用だ。

「用件は何ですか？早くしてください」

「いや、キミの鋭さ・行動力は大したものだ」

「ありがとうございます。では」

竹原に背を向けて足早に立ち去ろうとする。コイツと居ると気分が悪い。秀吉と明久で癒されよう・・・。

「しかし、それが

邪魔なのだよ」

「っ!？」

氷のような冷たい声に振り向く。俺の中の警報が鳴り響いてる。コイツは目的の為なら何でもやる奴だ・・・。竹原に背を見せない様にジリジリと距離を取る。

「そんなに警戒しないで欲しいな。キミには少しの間だけ

」

瞬間、召喚フィールドが発生した。

「ご退場願いたい」

「っ! 試獣召k

がつ!！」

後頭部に強い衝撃が奔った。痛い。痛い。イタイ。意識が遠のく。消えゆく意識の中俺に誰かが話しかけた。

「キミは深入りしすぎたんだよ・・・小此木遼平」

俺の意識は闇に落ちた。

第二十四話（後書き）

はい。とんでもない所で終わりました二十四話。

自分もビックリの展開ですよwww

このまま行くと、明久・改（もの凄い闇落ち）が暴走し始めるww。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2713n/>

俺とバカと召喚獣

2012年1月6日18時56分発行